





はじめに

- ・ 2024 ハロウィン企画の Pixiv 再録本です。
- ・ 海賊×ヴァンパイア設定をこじらせた伊奈スレです。
- ・ 年齢制限をかけるほどではありませんが、残虐な描写を含みます。  
それらを肯定しているわけではありません。

## Prologue

——西暦一八三〇年。

月の光が波に橋をかけたのだろうか。

「……やあ、驚いたな」

少年は感嘆の声を漏らした。そして聞く。

「……君、海の上を、歩けるの？」

砂浜に降り立った黒い影を見上げる。逆光で表情はよくわからないが若そうだ。同じくらいの歳かもしれない、と少年は思った。

「人間じゃないね……」

黒い影がそっと笑う。

「僕が何に見えますか？」

声は低く柔らかい。穏やかな発声だが、深い悲しみが滲んでいる。

少年は仰向けのまま、月を見上げて考える。夜空にほつき浮かぶ新円の月は、神秘的な感じがした。

「天使？……それとも、月の使い？」

黒い影はふふっと笑った。

「ハズレです。わざとでしょう？もしかして、口説いてんですか？」

「当たり」

ふわりと揺れる金の髪は、月の光を集めたような色をしている。岸壁の青い影が、切り絵のように白砂に映る。その先端に位置する二人。

「君は、ヴァンパイア？」

仰向けの少年を見下ろす人影が両手を軽く広げて微笑む。

「ええ。見ての通り。モルフォに誘われて」

ごつごつとした岩肌と、目が痛いほどの白い浜。それだけの島。生き物は青めく蝶と人と人ではない存在。

ヴァンパイアの青年がしゃがみこんで、少年の顔を覗き込んだ。

「貴方、どうしてこんなところに？」

少年は面食らったように右目を見開く。やがてその目は夜を映す。

「海賊が、無人島にいる理由は一つだよ」

事情を察し、人ではない青年は頷く。そして少年の近くに転がっている海賊の温情に目を向ける。

「銃、使わないんですか？」

「弾がもったいない」

少年の即答に、今度は青年が目を見開く。蝶の羽に似た色だ、と少年は口の中で呟いた。

「でも、……そんな体なら、死んだ方が楽でしょう？」

「死んだことがないからわからないね」

あつさりと答え、少年は右の瞳を数度瞬かせる。反対側の瞼には二羽のモルフォが眼帯めいて群がっている。

「……ねえ、君は、どこから来たの？」

「海の方から」

「歩いて？」

「時々飛びました」

少年がへえ、と声を漏らす。彼の視線が移動した。

「羽に、さわらせてくれる？」

「ええ、どうぞ」

青年は、少年の手をとり、自身の羽に触れさせた。指の感触は、分厚い皮膜に届かない。少年の目が好奇心に輝く。

「……コウモリの羽だ」

くすりと笑う。なんて素直で、なんて純粹な感想だろうか。

「ずっと昔。僕はコウモリだったのかもしれない」

他愛のない冗談を自然と言ってしまったくらい。美しい心のあり方を忘れていたことを知る。

少年の手が砂の上にはたりと落ちる。彼の呼吸はとても静

かだ。

「……コウモリ。お願いがあるんだ。聞いてくれる？」

銃を手に取り、引き金を引いてくれ、と。殺してほしいと言われたら。

「何ですか？」

それでもいいか、叶えてやろうという気になっていた。命を奪うことは、僕にとっては初めてのことではないのだし、と言いつ聞かせ。しかし、少年の次の言葉は全く違つて。

「一緒に、月を見ない？」

そのお願いは。無人島に、半死半生の状態で置き去りにされた少年が、渴いた声で口に出すものにしては、あまりに素朴で、ささやかなものだった。

「いいですよ」

青年は微笑みを浮かべ、彼の隣に腰を下ろした。膝を抱え、見上げた先にある星の海と満ちた月。少し朧で、光は柔く穏やかだ。

「……月なんて、海の上で何千回も見ただけなのに」

少年がぼつりと呟いた。

「陸で、片目の今の方が、何だかずっと綺麗に見える」不思議だね、と言う彼に、青年は頷く。

「僕も……、随分前から、綺麗な夜を忘れていました」

「前って、いつのこと？」

「五〇年くらい」

すごい歳上、と少年は声を出さずに笑った。

「ねえ、コウモリ」

「その呼び方……」

「月の裏側には、何があるのかな」

不思議なことを聞く、と思いながら、青年は少年のただ一つの瞳を見て、月を見て、また少年の瞳を見た。虹彩のオレンジ色は、いつか見た、思い出の中の夕焼けに似ている。

月の裏側に、何があるのか。そんなことを、生まれて初めて考える。もしかしたら、そこは楽園のように草木の生い茂る場所かもしれない。煮えたぎる溶鉱に支配された地獄のような場所かもしれない。ただ同じ地平が繋がっているだけかもしれない。

「それがわからないから、綺麗なんじゃないですか？」

ただ、どれにせよ、そこに人がいなければいい。それがきつと、一番綺麗だ。

「君の言う通りな気がする」

少年が瞼を閉じる。二度と開かないかと思われたが、とてもゆっくり、もう一度だけ。

「月、綺麗だね」

「はい。とても」

潮騒が青く染まる。月色の音は海。夜に溶ける羽を重ね、彼の頬にモルフォの翅が鱗粉を落とす。蝶の雨に彼は呟く。

「……名前くらい、聞いておけば良かった」

夕日の隻眼。鮮烈なオレンジを、日の光の下見てみたかったような気がした。



## 目次

|                |    |
|----------------|----|
| Prologue.....  | 4  |
| Crater .....   | 10 |
| Lunatic .....  | 16 |
| Drowning.....  | 22 |
| Undead .....   | 28 |
| Rampage.....   | 36 |
| Lost Boys..... | 42 |
| Marginis ..... | 50 |
| Grave.....     | 53 |
| Al-d-Noah..... | 56 |
| Epilogue ..... | 67 |

BLUE MOON

## Crater

月は、地球の二倍ほど離れたところにあるように見えた。われわれに向いている側の月面のある部分は非常に暗く、またある部分は非常に明るい。月の表面は、多数派の哲学者が考えているような完全な球形でなめらかだとはいえない。それと反対に、地球そのものののように、起伏があり、多くの凹孔や突起がたくさんある。月の全表面にいろいろな大きさの斑点が密接して散らばっている。

——ガリレオ・ガリレイ「Sinderes Nuntius」

西暦二五〇四年九月

界塚伊奈帆は、見えたものに思わず身を乗り出した。

「あれは……？」

舞い遊ぶ青い光が、帯状の群れとなり移動している。

「昆虫？ あれは蝶？」

四枚の翅。羽ばたく度に燐粉を踊らせるその光は数多。俄かに信じがたい。ここは、三〇世紀の月面だ。時空酔いか、それとも夢か。手首のモニタに表示されるバイタルサインを確認するが正常だ。

月は既に天体としての活動を終えた天体。重力は $1.62m/s^2$ 。表面温度はマイナス一八〇〜一三〇℃。大多數の生命体にとって、まごうことなき死の世界だ。大気のバリアの存在しないモノクロの地表に昆虫。真空の宇宙を舞い遊ぶ、絶滅した青い蝶。シャトルの窓から見える光景は、あまりに非現実的だった。

伊奈帆はさらに信じられないものを目にする。

「人？ ……じゃあないか」

クレーターの丘を歩く白い影がある。スペース・スーツもマスクもない。生身の身体で、まるでここがドーム内部の自然公園のような足取り。裸身に近い細身のおそらくは青年。彫刻のようなソリッドな美貌。その金の髪は、記録映像映画で見た、地球から見た月の色のように見える。横顔は怜悧で、蝶と戯れるような立ち姿は、ゾツとするほど美しい。

作業用アンドロイドだろうか？ それにしては、作りがアーティスティックにすぎる。観賞用に作られた個人所有アンドロイドが主役の、ムービーの撮影かもしれない。しかし、撮影ロボットが周囲にないのでそれもまた、違うのかもしれない。

その影は、やがて見えなくなった。月の亡霊、と詩的な表現が浮かび、伊奈帆はシートに頭を強く押し付けた。

翌日。出勤した伊奈帆は、真っ先に直属の上司のデスクへと向かった。伊奈帆の気配に気づいたのか、彼は数歩の距離でくると椅子を回して顔を見せた。伊奈帆は額に手を翳す。

「よう。おかえりさん」

「鞆戸警部。しばらく」

ムーンバレー機動警察隊本部。鞆戸孝一郎警部。彼はニヒルな笑みを浮かべ、スキットルを煽った。白色とブルーが基調の照明と流線形を多用した内装。清潔で無機質な空間において彼の人間臭い佇まいは、数世紀前の人間がタイムスリップしたかのような違和感がある。

「火星はどうだった？」

職務は主に治安警備、災害警備、雑踏警備、警衛警護、集団警邏及び一斉取締まりである。伊奈帆は星間連絡員として星々を飛び回っており、自分のデスクに座ったことは一度もない。というか、デスクがあるのかさえ知らない。探せばきつとあるのだろう。本部に出勤するのさえ初めてだが、所属はムーンバレー第6区。通称アンダーシックス。要するに治安の悪い無法地帯だ。伊奈帆の階級は警部補にあたる。

「プラントの増設は順調です」

「そっっちゃない」

「ゲリラ組織の存在は認められませんでした。チンピラ程度です」

「真面目腐った顔で俗っぽい言い回しをするから面白いぜ。そういうところ、似てるな」

鞆戸が椅子を勧めたが、伊奈帆は立ったまま首を振る。ビデオ通信で顔を見た事はあったが、実際に会うと彼に関する心象を改めざるを得ない。臭いが強烈。はつきり言って酒臭い。月でのアルコール摂取は違法ではないが、今は勤務中である。注意などされないのだろうか。生身の人間がほばいなくとも、交通課のパトロールロボットがそこらにいるはずなのだが。

「月に帰るの、何年ぶりだ？」

「十五年と三ヶ月です」

「普通に年を食ってれば、いいおじさんだな」

「連絡員の特権ですね」

基本的に、移動中はコールドスリープ・モード。肉体の経年変化はストップする。伊奈帆の実年齢と肉体年齢には大きな隔たりがあるのだ。

「早速悪いが、次の仕事は俺のバディだ」

「月の調査ですか？ 僕は連絡員ですが」

「話はどう通してある。月の仕事は不本意か？」

「いえ。仕事ですから」

「そう言うだろうと思ったぜ」

これを見る、とポップアップするモニタ。

「第6区で変死事件が立て続けに起こっている」

「変死事件……」

「ここひと月で六人。多いか？少ないか？」

「異常です」

鞆戸が片眉を上げた。ご名答、という表情。

「何故犯人が上げられないのか、解せない顔だな」

さらに重なるモニタ・ウィンドウ。

「月面都市の住民は人工知能“カグヤ”に市民登録される。

名前、性別、生年月日、住所、健康状態から秒単位の行動ま

で、極小のマイクロチップで全て記録されているのに、って

な」

でもそれが、と鞆戸は続ける。

「実は、全員ではない。って知ってるか？」

伊奈帆は話の先を促すため、鞆戸の顔を見た。

「開拓移民の中には、未登録者が結構いる」

「開拓移民の子供は登録義務があるはずです」

「つまり？」

「月面都市“ムーンバレー”建設の第一次開拓移民は二一〇九年。最後の第二十二次移民がやってきたのは二一八五年。カグヤは二一一五年完成。コールドスリープの技術が確立されたのは二四五五年のことです」

「だから未登録者はいないってか？」

「いえ。第6区は無法地帯でしょう」

「イエス、と見せかけてノーだ。月で生きていく上で、カグヤをちよろまかすことはできんさ。子ネズミ一匹の生体反応さえキャッチしているんだ」

「ムーンバレーに子ネズミなんていませんよ」

「ものの喩えだ」

鞆戸はデスクの引き出しを開く。私物が雑多に詰められており、整理整頓が必要だ。

「界塚弟。調査書読んどけ」

「了解」

差し出された直径のセンチメートルほどの光学記録装置を受け取る。左目に照射し、デバイスにインプット。ファイル名に、伊奈帆は思わず呟きを漏らす。

「“ヴァンパイア殺人事件？”」

「上もふざけてやがるのさ」

鞆戸は両手の平を天井に向け肩を竦める。

「大昔の怪奇小説か？ ぞっとしないね」

第6区ウエスト第3ステーションから始発のバスで帰った街には、青い空気の幕が張り、まだ起き出してもいない。バスを降りると、木枯が強く吹き付けた。模擬自然のクオリティはタイタンとは段違いだな、と感心しつつ、伊奈帆はコートの襟元を掻き寄せる。

寒さと空腹で体が冷え切ってしまった。家に帰るまでに、何か温かい飲み物が欲しい。

「……あ、開いてる」

視界に入った照明の灯った小さなカフェ。地球二十一世紀スタイルの、クラシカルなデザインの店構え。こんな時刻に、とは思ったが、助かるのは事実。そこに入ることにした。

ガラン、とドアベルを模した電子音が鳴る。夜明け前で、店内はほぼ空席だ。伊奈帆はレジカウンターへと足早に近づく。店員が小さく会釈をする。

「カフェ・モカを」

若い男性店員が頷く。揃えた指が、メニュー表の片隅を示す。真っ直ぐに伸びた指の形にはっとし伊奈帆は顔を上げ、驚いた。くすんだ金髪に青褪めたような白い肌、猫のような

釣り上がった眦と透明度の高い碧眼。

月の上を歩く人――。

同じだ。シャトルの中から見た月の亡霊。遠目だったから顔までよく見えなかったが、佇まいというか、存在感。重力場というか、引力。間違いない。

「はい。店内でお召し上がりですか？」

しかし、それは気のせいだろうかと思えるくらい、今日の前にいる青年は人間らしい。洗った白シャツに、制服らしい緑のエプロン。シャープに整った造作の割に表情は穏やかで、下がり気味の眉が親しみやすく、つい声をかけさせてしまうような魅力がある。ネコ顔、という形容があるが、それがしつくりくる。少なくとも、ロボットだとか幽霊みたいな感じはしない。

人違い？ だとしたら、シャトルの窓から見た風景。あれは、一体なんだったのだろう。白昼夢？ でも、夢にしてははつきりしている。

「あ、持って帰ります」

「テイクアウトですね。サイズはどうなさいますか？」

「大きいので」

「ホット？」

「はい」

ランプの下でお待ちくださいと言われ、伊奈帆はカウンターの先にある吊り下げランプの下に移動した。

店員も移動し、器具を操作してドリンクを作り始める。側に複雑な道具が沢山並んでいて、それぞれがどんな用途か何とはなしに考える。カチ、とスイッチが入り、クリーマーの電動音。遠くの梢の鳥の声が聞こえてくる。

人の少ない店内はとても静かだ。

「……昨日の昼間」

柔らかな声が囁く。上目遣いの猫目を見つめる。

「AZハイツの二〇七号室」

伊奈帆は眉を顰める。それは宛がわれた伊奈帆の住所だ。近隣への挨拶はまだ。表札だってあるわけない。このカフェは目についたから入っただけだ。……というのは楽観が過ぎる。

なぜバレた、とまず思い。

どの時点で仕組まれた、と考えながら、伊奈帆はコートの下にそっと手を入れ、ホルスターの金具を外す。

シーリングファンの音が大きく耳に障る。俯き加減の青褪めた顔。調理中のドリンクへ視線を落とし、微笑みを浮かべているこの青年は。

この青年は、何者だろうか？ 蝶の乱舞が脳裏に青い残像を

刻む。

伊奈帆は聞こえないように喉を濡らし、カウンターに肘をついて口を開く。

「どういうこと？」

くすり、と小さな声が出た。こちらのあからさまな警戒に気付いてない訳もないだろうが、屈託なく笑っている。マドラーをくるくる回し彼は言う。

「僕、二〇六号室に住んでいて。昨日、貴方を見かけました」

「お隣さんだったの」

合点がいつて、つい大きな声が出てしまった。借り受けたのは一般人が利用する集合住宅の一室。隣の部屋なら引越しに気づくだろうし、向こうはこちらを見かけていても不思議はない。

伊奈帆は居住まいを直し、ぺこりと軽く頭を下げた。

「こんなところでなんだけど、隣に越してきた界塚です。よろしく願います」

こうなったら、自己紹介くらいはしておいた方がいいだろう。隣人トラブルは避けたい。

「ふふっ。こちらこそ、よろしく願います」

青年はカップに蓋をし、マジックペンを手に取った。店のロゴマークの横にペンを走らせる。その白い指がランプを赤

く照り返す。

目が覚めるような美形で、物腰が柔らかくどこか茶目っ気もある。これはもてるだろうな。こんな客の少ない時間の勤務はもったいない、と伊奈帆は無責任な感想を抱く。

「はい、熱いうちに」

どうぞ、と差し出されたコーヒーを受け取る。大ぶりサイズの紙カップの側面にはコウモリのイラストがあった。

## Lunatic

見ろ、あの月を。不思議な月だな。どう見ても、墓から脱け出して来た女のやう。まるで死んだ女そっくり。どう見ても、屍をあさり歩く女のやう。

——オスカーワイルド「サロメ」

“ヴァンパイア殺人事件” 操作ファイルを表示。左眼窩のアナリティカル・エンジンからダイレクトに中脳へ送られるデータを伊奈帆は確認していく。

ムーンバレー第6区連続変死事件の被害者は六人。二〇代〜五〇代の男性。職業は違法薬取引、売春斡旋、反社会的組織活動など。殺害現場の共通点は以下の通り。

- ・死因は出血性ショック死。
- ・外傷は首筋の咬傷。
- ・発見は未明〜明け方。
- ・場所は裏路地、野外トイレなど。
- ・衣服の乱れたものもある。
- ・死体の皮膚や服に白い灰が付着。
- ・犯人の指紋毛髪体液などは皆無。

「大量失血だが血痕はないのは、何らかの器具を用いたからか。血液の採取が目的だろうな」

そこまで読んで、独り言ちる。自宅で、部屋着でベッドに寝転がっての姿勢。天井って、どんな場所でも変わり映えないな、とどうでもいい思考を通り抜け、先日の鞆戸の指示を回想する。

「第6区ではちょっとした騒ぎだ。パニック寸前。月全体を巻き込んだ大騒動になる前にカタをつける」

が、と鞆戸は腕を組む。

「お前は現地捜査に加わる必要はない。表向きはポリスではなく、地質研究所の職員だ。ほら、これが偽の身分証」

身分証を受け取り左眼でスキャン。名前以外はてんで出鱈目なプロフィールに眉を顰める。

「どういうことですか？」

「当面、一般人として暮らせ。それで、犯人を誘き寄せろ」

伊奈帆は驚き絶句した。数秒のあと口を開く。

「今時、囹捜査ですか？だから住まいを第6区に？」

「古典的だが、一周回って効果的だ」

無法地帯の第6区で囹捜査。厄介だな、という感想。これなら、地球の土壤調査に行く方が気楽だ。

「頼むぞ。界塚弟」

「伊奈帆です」

「はは。……おう、界塚。頼んだぜ」

伊奈帆は左眼を義眼モードに切り替え、眉間を指で押さえる。

「相手も分からず図捜査とか言われてもね……」

被害者にしても、いまいち使命感を奮い立たせる要素に欠ける。こういうのもなんだが、自業自得。恨みつらみで殺されても不自然ではない人間たちだ。

「月で過ごすの何年振りかな。……あまり懐かしい場所でもないけど」

とりあえず、休暇とでも思いマイペースに過ごすことにする。偽の職場に出勤するため、伊奈帆は立ち上がった。

明け方、空が白み始める前に伊奈帆はアパートに着いた。

偽の仕事はデスクワークが中心で、正直言つて死ぬほど退屈。これが当面続くのか、とうんざりした気持ちでポケットから鍵を出す。それにしてもなんとなくいう前時代的なセキュリティだろうか。主な生活環境が宇宙船の伊奈帆にとって、第6区でのアナログな暮らしは発展途上の開拓星に滞在しているような気にさえなってくる。

鍵を回すところで、カンカンカン、と足音に気づく。伊奈帆は鍵をポケットに戻し、鞆の蓋を開き、鍵を探すふりをして待つ。

階段を登り切って目を丸くしたのは、コーヒESHOPPの店員である二〇六号室の住人だ。Tシャツとジーンズの私服に、グレーのパーカーを羽織っている。アート・モデルのような端正な容姿の割に、ラフで気取らないファッションだ。

「あ、こんにちは……って時間じゃないですね。おはようございます？」

「どうも」

会釈に会釈。彼は伊奈帆の背後を通り過ぎる。コーヒの香りがふわりと鼻孔をくすぐった。

「あの」

「はい？」

伊奈帆は声をかけたものの口籠る。彼の顔を見ると、シャトルの窓から見えた光景が鮮明にフラッシュバック。

月の上を歩いていたの？……なんて。聞けるわけないか。

「えっと、長いのか？ 月で暮らして」

言った後でおかしな質問だと気付いたが、彼は半身を向けて頷いた。

「ええ。このアパートに住み始めたのは、つい最近ですけど」

「そうなんだ」

「貴方が越してくる、ほんのひと月くらい前です」

「へえ」

変死事件もここひと月。瞬時に頭に浮かんだのは、彼の持つ独特の雰囲気のせいだろう。人当たりが柔らかに優しい声と表情だけれど、どこことなく謎めいていて影がある。今の時点では考えすぎに違いないが、こういう直感馬鹿にならない。

彼は軽く首を傾げた。

「前もそうでしたが、この時間にご帰宅ですか？」

「いろいろです。昼間だったり、夜中だったり」

「そうなんです」

ガチャ、と隣の部屋が開く。

「またお店に来てください。あ、昼はいませんから夜に。サービスしますよ。ナイショで」

「え」

「それじゃあ。界塚さん」

パタン、とドアは軽やかに閉じた。

「何か報告あるか？」

「いたって平和です」

「お前はな」

ムーンバレー機動警察隊本部。伊奈帆は上司である鞆戸と休憩室のスタンドテーブルで斜めに向かい合っていた。鞆戸は持参したドリンクを煽る。濃度の濃い蒸留酒が強く香った。

「私生活で、変化は？ 彼女とか」

「プライベートな質問は苦手です。それに、その表現は時代錯誤で問題になりますよ」

「細けえなあ。プライベートな話をするために、わざわざ休憩室で話してんだろ」

伊奈帆は鞆戸の表情の変化を見つめたが、飄々として掴みどころがない。囃捜査と関係のあるオフレコの情報収集か。とはいふものの。

「普通に仕事場に行って、普通に帰って、普通に食事して普通に寝てます」

特に何の収穫も無い。深夜の路地裏をわざわざ通ってみたりもしたが、薬物の取引現場一つ押さえられていない現状。

「食事って、一人ですか？」

「一人です」

「ご近所づきあいはい？」

「いつの時代の話ですか？それ」

鞆戸はあ、と息を吐き、ぼりぼりと後頭部を搔いた。

「収獲無し、か……」

伊奈帆はここで切り出す。

「僕は、調査に加わらなくていいのですか？」

バディだと言いながら、事件の調査はせず数日おきに鞆戸の元を訪れ、訳の分からない世間話に付き合わされる。意図があつてのことだろうが、正直なところ、単調な生活に飽きてきた。そういう習性だから、星から星へと飛び回る連絡員をやっているのだ。

「冗だからな。自然に、ナチュラルに、だ」

「重複表現です」

「ほんつと細けえなあ、お前」

鞆戸はのぞき込むようにじいっと伊奈帆を見つめた。

「どうだ？ その左目」

伊奈帆は自身の左目に手を翳す。手を透けて見える鞆戸の体温は37.1℃。ほろ酔い期。

「結構使えます」

「ふうん。不具合はないか？」

「脳が傷むので、基本は義眼モードです」

鞆戸はスキットルのキャップを手持ち無沙汰にくるくる回した。

「今時分、どこかしら機械じゃない人間の方が珍しいっちゃ珍しいが」

そして、両肘を机について顎に触る。無精髭がざり、と音を立てた。

「健康な眼球を取り換えるのは、俺は躊躇うな」  
伊奈帆はカップを手を持った。

「仕事ですから」

ふうん、と鞆戸は宙を見る。そして、口籠った後こう聞いた。

「姉さん元気か？」

「次に目覚めるのは五百十八年後、だそうです」

失礼します、と休憩室を後にする。販売機の横、ダストボックスに半分残ったカップを放り込んだ。

左目を交換したのは八歳の時だ。姉がケプラー1649cへ行くことが決まって。

「ガンバだよ、なおくん」

そう言つて旅立つ姉を止められなかった。その機を待つていたかのように、所属するサイバネティクス研究所で試作品の検体にならないか、という提案があった。眼球を模した人工知能デバイス。脳の領域を拡張し、リアルタイムで様々な情報処理が可能。伊奈帆はそれを受け入れた。

理由は、生きるため。一人で生きていくためだ。そしてそのために、左目の交換は至極当然のことのように感じた。リハビリも検査も残酷なほど惨いものだったが、死ぬよりマシだと割り切った。便利な道具だが、脳の領域を侵略されるのは不本意だったし、万能感を得たいわけでもなかった。だから、特に命令の無い場合は義眼としてしか使っていない。

この出来事は乳歯が生え変わるように、伊奈帆にとって自然なことだった。だから、そのことについて同情的な態度を示されるのが理解できない。収まるべきところに収まっただけなのに。しかしその感覚が一般的な人間性と乖離していることもまた理解している。

どうして、僕の左目はこんなに僕に馴染むのだろう。おそらく前世か並行世界の自分がそういう運命だったのだろうと結論付ける。それが一番簡単だ。だって、理屈が無いのだから。



## Drowning

ところで、月光による自分の影をみつめているとそのなかに生物の気配があらわれてくる。それは月光が平行光線であるため、砂に写った影が、自分の形と等しいということがあるが、しかしそんなことはわかり切った話だ。その影も短いのがいい。一尺二尺ぐらいのがいいと思う。そして静止している方が精神が統一されていいが、影は少し揺れ動く方がいいのだ。自分が行ったり戻ったり立ちどまつたりしていたのはそのためだ。

——梶井基次郎「Kの昇天」

「あ、こんばんは」

「こんばんは」

伊奈帆の来店に、商品棚を整理していた青年が笑顔を見せた。隣に住んでいるネコ顔美人。今日はエプロンの下にネイビーのシャツ。襟元の第二ボタンが取れていて、華奢な鎖骨が覗いていた。

「来てくれたんですね。嬉しいですよ」

つり目が親しげに丸くなる。時刻は午前一時半。こんな時

間に営業している飲食店は、第6区のみ。他のエリアでは営業禁止時間である。それにそもそも、富裕層の人々は月の中を出歩かない。仕事もレジャーも自宅で事足りる。出歩くところがあるとすれば、星間旅行のためにスペース・ポートへ行く時だ。

「通り道だから」

彼はカウンターの内側に移動した。伊奈帆はメニュー表を眺める。

「何にしますか？」

「じゃあ、……パンプキン・スパイス・ラテのホットをトールで。ホイップクリーム、ホワイトモカシロップトッピングでお願いします」

「はい。パンプキン・スパイス・ラテのホットをトールで。

ホイップクリーム、ホワイトモカシロップトッピングですね。

お席でお待ちください」

上手く注文出来たみたいだ。伊奈帆にとって、第6区の、こういった不便で古臭いところは好ましい。豆からひいたコーヒーを、手作業でカスタマイズする。ボタン一つで即座に配給されるよりも、生が強く「におう」のだ。

アイボリーのカーテンロールが下りた窓際席に伊奈帆は座った。義眼モードをオフにしばらくとしてみる。すること

がないと時間が長く感じるが、今は仕事の時間じゃない。

「お待たせしました」

声に臉を開き、テーブルに置かれたトレイを見る。

「これ……」

カップの横に、パラフィン紙に置かれた焼き菓子が二つ。

コウモリ型のジンジャークッキー。

顔を見上げると、彼は人差し指を唇に当て、片目をぼちりと閉じた。

「サービスするっていいましたよね。お隣さんのよしみです」

「いいのかな。ありがとう」

ウインクして初めて見た。なかなかの威力。からかい上手なのか天然なのか。それとも……。

「ここ、座ってもいいですか？」

「どうぞ」

する、と二人掛けのもう一方に腰を下ろす。考えるより前について「どうぞ」と言ってしまった。脈拍が速く、動揺している自分を発見。珍しいことだ。

「名前を聞いても？」

向かいに座る彼が、少し身を乗り出して聞いた。そういえば、と彼の名前を知らないことに思い至る。

「界塚伊奈帆。君は？」

「スレインです」

開拓移民は、元は地球の科学者もしくは労働者。第6区の月生まれには、ファミリーネームを持たない住民が多いのだ。彼もそういう一人だろう。

「界塚さんって、何歳なんですか？僕は十七です」

「伊奈帆でいいよ。十七。同年」

「ええ？本当ですか？」

「どっちの意味で言ってるの？それ」

「もつと下に見えました。十五歳くらい」

嘘は言っていないし、どちらかと言えば事実は逆だ。十七は所持している身分証の年齢。星間移動中の凍眠時間を除くとそのくらいではあるが、実際の年齢は倍以上である。

「君、天然だって言われるだろう。悪い意味で」

エレガントな見た目の割に、わりとずけずけ物を言う。変なやつ、と少し思うが、向こうも同じ心地だろう。

伊奈帆はドリンクを啜った。ほどよく温かく甘い。クッキーを口へ運ぶ。ちゃんとしたクッキーだ。味わい深くて優しい甘さ。ピリツとしたスバイスも本物っぽい。このような技術が残っているのは、第6区だけだろう。

「何か話さないの？」

伊奈帆は聞いた。スレインは、仕事に戻るでもなく、何も

言わずにずっと前に座っている。話があるからそこにいるのだと思ったが。

「伊奈帆の話が聞きたいです」

「僕？」

スレインは頷く。唇がVの字に近い形にきゅ、と引かれ、そして開く。

「どこで生まれて、どんな風に育ったとか。好きなものや嫌いなもの。一番の思い出とか」

「典型的なデートの会話だ」

伊奈帆がそう返すと、スレインは髪を耳にかけ、うつそり笑い首を傾げた。

「デートします？ 僕と」

「ぶっ」

どきつとする仕草と言葉に飲みかけたドリンクを吹き出しそうになる。息を吸うと気管に入ってごほごほ噎せた。

「ふふっ。冗談半分です」

「え？ は、半分？」

「あ、お客さん」

スレインは立ち上がる。入店したカップルに挨拶を送り、エプロンの裾を直し立ち去る寸前。

「じゃあ、また。伊奈帆」

と、またウイंक。鮮やかな去り際を、伊奈帆はただただ見送ってしまった。

裏路地で仰向けの死体を見下ろす。

「首筋に赤い傷。大量出血。所々の白い砂」

鞆戸がウォッチを操作して、光学モニタが表示される。現場の状況を一通り確認し、伊奈帆は口を開く。

「咬傷ですね」

「同じ手口だ」

いつもの休憩室での雑談中、事件の報告があった。第6区ウエスト89-1で変死体が発見された。現場に血痕は無し。首筋に傷。コード・ヴァンバイアだ。伊奈帆は鞆戸に連れ立って、初めて現場を訪れていた。

「ここから、血液を抜き出して？」

鞆戸は肩を竦める。

「夜な夜な血を吸い漁るドラキュラか。大昔のオカルトだ。捜査するのもうんざりだぜ」

首筋に赤い穴。二ヶ月で七人。この頻度の他殺は、こと月において百年単位で前代未聞だ。彼の立場からしたら、上を下へと、何かと煩わしいのだろう。

伊奈帆は被害者の左側にしゃがみ、マスクを取って首筋に顔を近づけた。

「界塚。何か気付いたか？」

「はい」

伊奈帆は被害者の傷痕近くを指で示す。

「この匂い。嗅いでください」

鞆戸はげえつと声に出し、オーバーアクションで一步後ろに後退る。しかしすぐに首を振り、彼はマスクを外してしゃがんだ。

「まじかよ……。ん？」

匂いは調書に記録されない。現場で初めて得る生身の人間が嗅ぐ“におい”という情報。鞆戸は伊奈帆を振り返る。

「なんだ？ このいい匂い」

そう。血なまぐさい殺害現場に場違いな香りが残っている。

伊奈帆は答える。

「花ですね。香水などの精製したものではなく、おそらく生花」

「おいおい。月に花なんか、あるわけないだろ」

鞆戸が言いながら立ち上がる。伊奈帆は彼に光学モニタでたった今検索した図表を示す。

「いえ。ここ数年、火星からの輸入品目にあります。主に企

業や団体の式典用として取り扱われていて、民間には卸せていませんが」

「ということは、犯人はその流通ルートのどこかにいるってことか？」

「管理者をあたりますか？」

「そうだな……」

鞆戸は顎に手を当てしばし逡巡。やがて彼は首を振る。

「俺がやる。そのデータ送れ。お前は、囑捜査を続ければいい」

深夜のコーヒーは眠れなくなる、という話だが、そもそも眠る時間を夜に設定する必要はない。特に連絡員は、不規則な入眠と覚醒を強いられる。だから、いつ何を飲んでも、特にこの程度のカフェインならば何の問題も無い。

……と理論武装を固めつつ、伊奈帆は深夜二時にコーヒーショップの扉を開けた。

「こんばんは、伊奈帆」

「やあ。おすすめある？」

スレインがいた。この時間のシフトは人数が少なく、彼一人のことが多い。どの星でも、人類は朝に起き出し夜に眠る、

という生活様式を頑なに守ろうとする。それは未発達な惑星ほど顕著だ。本能に刻まれた地球の名残だろうか。

「これなんか、どうです？」

スレインが示したのは、ナッツ・フレーバーのブレンドコーヒー。液体の色は黒褐色。

「酸味が控えめであっさりしてます、香りがとてもいいですよ」

「苦い？」

ふふっとスレインが笑った。

「うんと甘くしましょうか？」

「……いや、じゃあ、これにする」

「へえ、船で？」

「うん。プロキシマに向かう宇宙船の中で生まれたんだ」

二人掛けのテーブル席に向かい合って雑談。すっかりいつものことになった。

「じゃあ、伊奈帆の故郷は銀河ですね」

「そういうことになるのかな」

伊奈帆はトッピングなしのコーヒーを啜る。想像通り、苦い。しかし、想像よりも飲みやすい。というか、ちゃんと美

味しく感じる。コーヒーってこんな味をしていたのか、という知見を得た。思考がクリアになる実感は成分の純度が高いからだろう。眠れなくなるのも分らないではない。

「君は？ スレイン」

スレインはうーん、と腕を組み天井を見上げた。シーリングファンが四回転。

「……あまりよく思い出せませんが、寒い場所でした。雪が降っている日をよく覚えています」

「雪……。どの星？ エンケラドゥス？ エウロパ？」

スレインは無言で微笑む。答えられない、というアンサーだ。

「月へは、どうして？」

「月の裏側を見てみたかったんです」

「月の裏側？ 未開拓エリアのこと？」

スレインはまた何も言わない。唇が描く弧は完璧に整っている。

「民間人の立ち入りは許可されていないよ。それに、何もないでしょ？」

「そうですね」

スレインは伏し目で数度瞬いた。長い睫毛が頬に青い影を落とす。

「そう。何もなかった」

本当か嘘か、わからない。でも、とても寂しそうな表情だった。彼の睫毛の影を見ながら、伊奈帆は、蝶と歩く白い影の印象を思い出していた。

蒼穹の風は、わが耳に一つの音のみを囁き、海のさざ波もいつまでも繰り返し呟くのだ——モレラ、と。しかし、その娘は死んでしまった。私は自分の手で娘を墓へ運び、そして思わず長く、苦々しい笑い声をあげてしまった。二人目を埋葬しようとした納骨堂から、跡形もなく消えていたのだ——最初の——モレラが。

——エドガー・アラン・ポー「モレラ」

——伯爵の顔は精悍な荒鷲のような顔であった。肉の薄い鼻が反り橋のようにこんもり高くつき出て、左右の小鼻が異様にいかり、額はグツと張り出し、髪の毛は横鬢のあたりがわずかに薄いだけで、あとはふさふさしている。太い眉がくつつきそうに鼻の上に迫り、モジャモジャした口ひげの下「へ」の字に結んだ、すこし意地の悪そうな口元には、異様に尖った白い犬歯がむきだし、唇は年齢にしては精気がありすぎるくらい、毒々しいほど赤い色をしている。そのくせ耳には血のけが薄く、その先がいやにキュツと尖っている。顎はいかつく角ばり、頬は肉こそ落ちてい

るが、見るからにガッチリとして、顔色は総体にばかに青白い——

「何、読んでるんです？」

深夜のカフェ。いつもの席でモニタを眺めていると、スレインがひよい、と背後から覗き込んだ。伊奈帆にとって、書籍の閲覧は左目だけで事足りる。わざわざモニタを広げて一般的な読書スタイルは周囲への配慮である。焦点の曖昧な無表情で椅子に座り微動だにしない来客は、店側も扱いに困るだろう。まあ、理由はそれだけではない。

「怪奇小説」

「小説うう？」

想定以上の反応に逆に驚く。話題作りは大成功だが、声の響きが引く掛かる。

「何、その反応」

スレインはだって、と両手を腰の後ろで組んで言う。

「意外です。情緒がなくてデリカシーゼロ、朴念仁のザ・理系男伊奈帆が、フィクションなんか読むんですね」

「……君、失礼だって言われるだろう。勿論悪い意味で」

「そんなこと言うの、伊奈帆だけです」

スレインは空のトレイを持ったまま向かいに座った。この行動はいつものことだが、今日は店員がもう一人いる。こん

なに堂々と仕事をさぼっていいのだろうか。こっち見てるけど。

「怪奇小説って、どんな？」

スレインは同僚の視線に気付いているのかいないのか、そう言っただけを輝かせている。

「つつこむね」

「お話、久しぶりなので」

「ブラム・ストーカー著『ドラキュラ伯爵』」

はっとした表情になり、彼はわざとらしく口角を上げた。

こんなあからさまな作り笑いも珍しい。スレインは黒目を瞼の縁に沿ってぐりと回し、首を傾げて頬杖をつく。

「ハロウィンも廃れませんか」

ハロウィン。伊奈帆にとっては、起源も知らないお祭り騒ぎだ。第6区で目に付く空想上のモンスターや血なまぐさい偉人、童話の登場人物などをモチーフにした飾りつけや商品は、星間連絡員としての暮らしが長い伊奈帆にとって新鮮だ。どこもそれほど豊かではなく、地球の文化が継承されているとは言い難い現状なのだ。

などと口に出すこともできず、伊奈帆はカップを口に運んだ。以前も頼んだカボチャのホットドリンク。視線を滑らせると、目と口に切れ込みを入れたカボチャのレブリカが店内

のそこかしこに配置されている。

「この店も寄せてるよね。そんなに大事な行事なの？」

「本来は古代ケルトの魔除けの行事です。あの世とこの世の間の門が開いて悪霊などがやって来るので、人間だと気付かれないように仮装をして身を守ったとか」

悪戯っ子には、お菓子をあげるといいんですよ、と彼は手を翻す。

「へえ」

いつぞやのジンジャークッキーが一瞬脳裏を過ったが、考えすぎだと結論付ける。

「スレイン、よく知ってるね」

「こういう話、嫌いですか？」

「興味深い。月にも悪霊がいるのかな」

スレインがくくつと笑った。ジョークが珍しく成功したらしい。

「たとえても、皆、身を守るなんて考えてないでしょう。」

仮装がしたいだけじゃないですか？」

ファンファンファンファン、と天井の風車が眠たそうに鳴く。伊奈帆は思考を一巡りさせ口を開く。

「ねえスレイン」

「はい」

「十月三十一日の夜って、仕事？」

「コスプレはしませんよ？ 僕」

「先読みすぎ。ま、図星だけど。残念」

スレインはくすりと笑った。

「コスプレはしませんが、いいですよ。それが、デートのお誘いなら」

「……………え？ デート？」

「違うんですか？」

「いや、違うない」

そういえば、以前冗談半分にデートの誘い文句を言われた。これは脈ありか？ とにかく、この機会を逃す手はない。デート。……デートか。デートなんかしたことないから、すぐに言葉が出てこない。

「え……………つと。じゃあ。……ムービーでもどう？」

「はい。あ、でも……………」

スレインは眉尻を下げた困り顔で口籠る。

「何？」

「ハロウィンだからって、……ドラキュラは、……ちよつと。

もっと楽しい、子どもも見るとな映画がいいです」

うん、と頷き伊奈帆はモニタを出して十月三十一日の上映スケジュールをポップアップする。

「じゃあ、これとか」

伊奈帆が示すモニタを引き寄せ、スレインは目を瞬かせる。

「ピーター・パン……………？ はは」

苦笑い。流石に子どもっぽすぎただろうか。

「駄目？ なら……………」

「いえ。これにしましょう」

スレインはピ、と上映時刻を表示させ、レイトショーでいいか、と聞いた。もちろん異存はない。第6区ノースタワー二十一時三十五分の上映回を選んだ。

「迎えに行く？ 待ち合わせ？」

「僕たち、お隣さんですけど」

「形から入るタイプ」

スレインはくすりと笑いを返し立ち上がる。仕事に戻るようだ。椅子を戻し、背もたれに置いた指を揃えて彼は言った。

「じゃあ、迎えに来てください」

「わかった。家にいてね」

「はい」

そしてくると踵を返し、大股でカウンターに消えていく。彼のこの去り際の潔さは、いつ見ても爽快だ。

銃を使うことにならず良かった。

「スレイン、大丈夫？」

足音が遠ざかり消え、伊奈帆は聞いた。そして聞いてから、大丈夫なわけ無いだろう、と自身を語る。

月面都市ムーンバレーは第1区から第6区の6つのエリアで構成されている。人工知能カグヤが位置し、政治、産業、ターミナルが集結する中枢都市第1区。医療機関、研究施設が集結する第2区。第3区は食料プラント。第4区から第6区が市民の生活圏。区のナンバーはランクを示し、第6区は開拓時代からの名残を残す最も古く、最も入り組んだ、最も治安の悪いエリアだ。だから機動隊の本部は第6区にある。循環処理系の不具合からくる不潔な裏路地が存在し、そういう場所では犯罪行為が横行しているためだ。強盗。薬の売買。売春。暴行。開拓星では珍しくもない光景。こういう現場は初めてではないが……。

「大丈夫です……」

言った後、口を覆いごぼごと咳き込む彼の背を咄嗟にさする。口から粘性のある液体が吐き出され、指の間から零れた。服の破れた部分から真新しい傷が見える。四種類の体液

が服と地面に染みこみ、肌をべっとり濡らしていた。

「そうは見えない」

つり上がった目がこちらを睨んだ。いつにもこやかで温かな彼の、こんな顔を見るのは初めてだ。

「それなら、どうして聞くんですか」

それもそうだ。この状況で無神経に過ぎる失言だった。スレインは口を固く閉じ、衣服を整え始める。ボタンを留める指が悴んだようにぎこちない。

何か拭くもの、とポケットを探るとハンドタオルがあった。差し出すが受け取ってもらえない。伊奈帆はかまわず顔の周りをそれで拭い、彼の腕を肩に回した。弱々しい抵抗があったが、スレインはそっぽを向いてぼつりと言った。

「……汚れますよ」

「洗えばいいから」

スレインの身体を支えて歩き出す。入り組んだ、狭くて臭い路地裏を、前後を警戒して進む。

「……こういうこと、よくあるの？」

伊奈帆が聞くと、スレインは伊奈帆の顔を見た。すぐに視線を横に流す。

「……時々」

「気をつけたほうがいい。君は目立つ」

くくっ、とくぐもった笑い声がした。こんな笑い方を聞くのは初めてで、内心ぎよっとする。

「心配してくれるんですか？ どうして？」

突き放した冷たい声だが、体重をこちらに預けた頼りない足取りだ。相手の立場や気持ちを想像するのは不得手だが、彼が屈辱的な最低の気分にいることは分かる。

「仕事だから」

好きだから、と言ったらきつと傷つくだろうと思った。だから二番目の理由を伊奈帆は言った。スレインは怪訝な表情でこちらを見上げる。

「……仕事？」

「人助けが仕事。って、僕は思ってるんだけど」

言い訳めいて聞こえたら不本意だが、これが本音だ。青臭くてセンチに過ぎるから、誰にも言ったことは無い。スレインは不思議そうな目でじっとこちらを見つめている。

「現実はなかなか。組織っていうのは難しい」

「ふふっ」

いつもの笑い方が見られて、伊奈帆は安心した。スレインは顔を向こう側に向け、ぼつりと呟く。

「……嫌いになりました？ 僕のこと」

「まさか」

歯の音がカチカチと鳴るのが聞こえた。伊奈帆はぐったりとした身体を引き寄せる。

「君が無事で良かった。……ごめん、無事じゃないか。でも、命があって」

スレインは返事をしなかったが、ふっと小さく息を漏らした。

路地を抜けた夜更けの街に、人通りはほとんどない。これなら、さほど目立たず歩いて帰れるだろう。

「家まで送るよ。隣だし」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

スレインの部屋に入り、伊奈帆の視線はあるものに固定された。カーテンを閉め切った部屋に暖色の照明。家具も持ち物も非常に古い、というか、アンティーク。年輪が歪な木製の椅子なんて、月面によくあったな、と驚く。

その机に、在り得ない物があった。

「花が珍しいですか？」

「珍しいよ」

透明なアクリルの水差しに飾られているのは、既に失われたもののはず。地球の花。咲き誇る白い花が。……いや。よ

く見たら、仄かに紫がかっている。淡い色の花卉が緑色の茎の上部に密集していた。華やかで豪華な造形と裏腹の儂げな色彩。なんとも美しいものだ、と伊奈帆は花をじっと見つめた。火星の空にどこか似た色のその花は、怖いくらい綺麗で、少し異様な感じがした。

「いい匂いでしょ？」

言われて、聴覚に香気成分が知覚される。

「本当だ……。あ、それよりも手当しよう。葉とかは？」

伊奈帆は目に付いたソファにスレインを座らせ、ざっと周囲を見回した。

「その棚に」

スチールの棚の右端に、プラスチックの容器があった。中身を確認し、伊奈帆は首を振る。あるのは包帯と絆創膏が少し。消毒液などはない。

「足りないよ。僕の部屋から持ってくる」

伊奈帆は玄関先で振り向く。スレインはこちらを見ており視線がかち合う。不安そうな瞳だった。

「その間に、君は体を洗って」

「……ありがとう、伊奈帆」

「この背中……」

「……まだ、残ってます？」

凄まじい傷の痕。いや、さつきついた傷ではない。その部分には不思議なことに既に血が止まり、再生の兆しがある。そうではなくて。

「飛べたんですよ。僕」

そう。その位置と数はまるで、翼を引きちぎられた痕のような様相を呈していた。肩甲骨の辺りを中心に縦横に奔る無数の傷痕。引き攣れた皮膚は白く盛り上がり組織の色が透けている。

「飛べたって、どういうこと？」

「コウモリのような羽があつて。時々、夜空を飛びました」  
嘘か本当かわからない。彼の話はいつもそうだ。何かを秘めていて、そこに触れないように外殻を抽象的な言葉で語る。とりとめがなく、いいかげんで、冗談みたいにきこえるそれは、御伽噺のようだといつも思う。

「でも、……随分前に無くしてしまった」

スレインが自嘲の声で笑った。

「冗談です」

多分、嘘ではないのだろう。しかし事実でもない。  
「君の話は、事実と空想の判別が極めて難しい」

「はは」

おそらくは、彼にとつての真実というだけ。その真実を伊奈帆は知りたいと思う。

「……こんな大怪我。よく生きてたね」

「そういう身体なんです」

どういふ体なんだろう、と思ったが、今のこの状況でも口にできる問いではない。

「でも、あまりに痛かったから。……僕は記憶を失ってしまった。次に目を覚ました時には、地球のアパートのベッドの上でした」

「地球……？」

罪滅ぼしか、それとも優しさだったのか分かりませんが、とスレインは俯いた。

「それまでのことを忘れていました。書き換えられた偽りの記憶で、僕は地球の学校に通った」

「学校って、どんな感じ？」

スレインは肩越しに振り向く。悪戯っぽい微笑みが目元に浮かんでいた。

「君と同じ名前の、同じ顔の男の子がいましたよ」

「僕と？」

「ええ。話し方もそっくりです。理屈屋で、話が長くて、時々

すぐく子どもっぽくて」

「……そんな風に思われてるんだ、僕」

「あ、勘ねました？」

「別に」

「ふふっ」

スレインは肩を揺らした。血の滲むその肩に伊奈帆はそつとガーゼを当て、チョキン、と鋏で大きさを整える。

「僕はその子を、オレンジ色と呼んでいた」

「オレンジ色？ どうして？」

「雨の日にぶつかって。転校初日で。彼はオレンジ色のレインコートを着ていたんです」

「クラシックなコミックにありがちの展開だ」

「運命の出会いってやつですね」

スレインはにっこり笑ってこう言った。

「今の話はどうですか？」

拍子抜けして目を瞬く。嘘か本当か。荒唐無稽な話だ。作り話でからかったのだろうか。それにしては、笑顔がひどく寂しげだ。瞳の色が揺れている。

「雨の日の転校生って、詩的だね。展開はベタだけど」

「ふふ」

伊奈帆は最後のサージカルテープを指で押さえた。青褪め

た白い背に無数の傷痕。その上にはり重ねられたガーゼと包帯が病的で痛々しい。

「……君が別の人間だって、心の底ではわかってるんです」  
スレインは自身の背中に触れようと、肩の上から手を伸ばす。肩甲骨のテープの上を白い爪がぎり、と引っ掻く。

「でも……。面影を探してしまう。よく似ているから」

とても小さな、吐息のような囁きだ。伊奈帆は聞こえないふりをした。

分らぬ。全く何事も我々には分らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。

——中島敦「山月記」

「これは、ブルームーンです」

「ブルームーン？」

「品種の名称です。青いバラは、自然界に存在しない、人工的に作り出された植物です。だから、製作者好みの名前をつけるんですよ」

怪我の具合はどうかと、伊奈帆は翌日、隣の部屋をノックした。インターホン越しに会話をし、夜なら、と会う約束を取り付け今に至る。

「僕には、紫色に見えるけど」

「僕にもそう見えます。赤みを残した、とても淡い青色です

ね」

赤、黄、白、ピンク、黒、オレンジ。バラの色は様々にあり、そこに青は存在しないとスレインは続ける。

「長い間。青いバラを作るのは、不可能だと言われていました」

消毒やテープの張り替えを終え、スレインがせっかくだからお茶でも、と淹れてくれた本物の紅茶をソファで飲んで、花の話を聞いている。

「でも、科学はそれを可能にした。だから、青いバラには二つの花言葉があります」

複雑で有機的なバラの香りが漂う室内。スレインは木製の椅子に座り、机に頬杖をついている。暖色灯は彼の頬を柔らかく染め、花を見つめる眼差しはどこか遠く。幻想的な光景だった。

「不可能。そして、奇跡」

花の色を照り返す唇が花のまじないを告げる。彼は物想いに沈んでいるようだった。伊奈帆は彼の物憂げな横顔を眺めているうち、その話を続けなくなった。

「ブルームーンはかつての地球で十九年に七回起こる、大気中の塵の影響により月が青く見える現象。その名をつけられた花が、月で咲く。ロマンチックだね」

スレインの顔が伊奈帆に向く。

「そういう話、嫌いですか？」

「いや。興味深い」

伊奈帆は空のカップを持って立つ。スレインも立ち上がった。

「ごちそうさま」

キッチンに向かおうとしたらスレインが両手を差し出した。足を止め、彼にカップを手渡す。スレインは眉尻を下げて困ったような笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、お菓子かなんか、あれば良かったんですが」  
 手当の礼だろうか、と思うが、善意一〇〇%というわけではない。それは聡い彼ならわかっているはずだが。……だからこそその言葉だろうか。

僕が彼を好きなように、彼も僕を好きなのだ。

「どうして謝るのさ」

伊奈帆はこういう交流に、これまでとんと縁がない。なんだかくすぐったい感じ。だけど、うん。悪くない。

玄関のドアノブを握って振り向く。スレインは両手を体の前で軽く握って立っていた。

「またお店で頼むよ。甘いやつ」

笑った額に髪がかかり、ツンと湿布の匂いがした。

「来てくださいね。今度はケーキをサーブしますから」

「うん。その前に、明日。迎えに来るから」

「はい」

バタン。伊奈帆は閉じた扉を凝視する。

『生花の流通ルートは意外に手広い』

『俺も知らなかったが、プラントで鑑賞花の生産を始めているそう。だ。桁が二つ違うんじゃないかねえかつてくらいの値段でたまたげたぜ』

鞆戸から、そんな話を聞いたばかりだ。書物によると、ヴァンパイアは、日の光を嫌い、バラの花を好むという。

殺害現場に残っていたのは、バラの匂いじゃなかったろうか。

「……何を考えてるんだか。僕は」

生花の流通ルートは想定より広かった。あのコーヒESHOPPだって、花を飾ることがあるかもしれない。スレインがプラントで昼間働いている可能性だって。伊奈帆は心の中で首を振る。これは確証バイアスだ。

犯行は全て夜。人目のつかない場所。衣服の乱れた死体。

首筋の噛傷。花の香り。

スレインは疑わしい。先日の暴行は、もしかしたら未遂現場だったのではないか。『マードー』の。

十月三十一日十八時。

「まるで、ヘンゼルとグレーテルだな」

照度の低い薄汚れた高架通路。錆の浮いた欄干に凭れ鞆戸は言った。

「何ですか？ それ」

伊奈帆はしゃがんだ姿勢のまま、振り返らずに聞く。

「森に置き去りにされた兄妹が、帰り道を残すためにパン屑を落とす。御伽噺さ」

「なるほど。言いたいことはわかりました」

死体の固くなった拳をこじ開ける。やはり。グチャグチャになった薄紫の残骸を一片、伊奈帆は摘み上げた。

「でもこれは、帰るために残したわけではないのでは」

「もののたとえさ」

ルナゲートAcap31連結通路に濃厚に残る死と花の匂い。死亡推定時刻は十四〜十二時間前。八番目の死体は花を握り、その周囲には花びらが散っていた。

「ルナゲート……。名前ばかり格好いいが、開拓時代の搬入口だ。その先は機能を停止した作業ロボットの掃き溜め」掃除屋だって見向きもしない骨董品だ、という鞆戸の言葉を聞きながら、伊奈帆は、今はもう使われていないゲートの

先を見つめた。450km/hのトロックを収める3.4×4.5の楕円形のゲートは三層になっている。恐ろしいことに、その開閉は手動で可能だ。旧式のスペース・スーツとボンベが申し訳程度に壁に掛けて設置してある。正常に使えるのかは不明。伊奈帆は立ち上がり、ゲートを見つめ口を開く。終点である縁の海を越えた先。そこは月の裏側だ。

「鞆戸さん」

「なんだ」

「まどろっこしいことはやめましょう。犯人の目星はついてるんですね」

半身を向けると、鞆戸と目が合う。見据えるような視線に酔いは見られない。伊奈帆は確信を得る。

「僕の仕事は隣人の監視ですか？」

「そうだ」

鞆戸はあっさり頷いた。

「お前の隣人。脱走したんだ」

「脱走？ 監獄ですか？」

「それならとくにお縄だ。違う。2区のラボ」

「まさか、被検体？」

伊奈帆は驚き声を上げる。電流が流れたような衝撃だった。2区のラボ。この文脈でその言葉が指し示すのはサイバネ

テイクス研究所。あそこにいたのか、彼もまた。

「そうだ」

思わず口元を覆う。手当ての時に見た凄まじい傷痕。あの傷は、まさかラボでの？だとしたら……。

「どんな……、実験の？」

鞆戸はきっぱり首を振った。

「何もわからん。捜査の際、知らされたのはフォトとコードネームだけだ」

彼はシニカルな表情で口角を上げる。

「事情は秘匿された情報量で察したさ。……連れ戻すのは気が咎めたから、報告を怠り時々様子を見ることにした。なあ、界塚。俺のこの行動が理解できるか？」

「はい」

「細かいお前が、職務怠慢、って言わないんだな」

「続けてください」

鞆戸はポケットに手を入れ欄干に凭れる。俯く視線は自身の靴を見ていた。

「6区で変死死体が上がった。まあ、アンダーシックスだからな。変死くらいはない。しかし、他殺と判明。あいつがやって来て三日目だ。まだその時は関連付けて考えてはいなかった」

「三日……」

「そして、調べてみたらあいつが“カグヤ”にいないことがわかったんだ」

「え？」

鞆戸がゆるく首を振る。

「チップがない。迂闊だった。被検体のレベルによるが、そもそも登録されない人間がいる。2区もまた無法地帯だ」

チップがない……。月面都市ムーンバレーにおいてカグヤに存在しないというのは、人間として存在していないということだ。

「生体反応も、生体データもない。実態がそこにあるのに、だ。そもそも、だ。現場に痕跡がない。出どころの分からない白い灰だけ。証拠がないんだ」

切羽詰まった響きがあった。伊奈帆は今聞いた話を脳内で反芻し、そして聞く。

「どうして僕なんですか？それに、なぜ初めから言わないんです？」

悪かった、とまず謝罪があった。鞆戸は下げた頭を上げて言う。

「先入観を植え付けたくない、つてのが一番だ。お前の頭と運と直感を信頼してる」

頭と、運と、直感。それは僕も同じだ。それを頼りに生き延びてきたのだから、と伊奈帆は頷く。

「それで、界塚。お前から見て、どうだ」

「……」

「イエス、と受け取るぞ。いいか？」

「……はい」

現場に残る花びらは、薄紫のバラの花。ブルームーン。輸入品目にもプラントにもない奇跡の意味を持つ花だ。色も、匂いも覚えている。スレインの部屋で、この花について話した言葉の一つ一つも。

鞆戸が伊奈帆の正面に立つ。真剣な表情だった。

「ムーンバレーで人死はまずい。たとえそれが治安最悪のアンダーシックスでも、他殺なんてもつてのほかだ。ここは人工知能によって完全にコントロールされた生命空間だということをおぼろげに忘れるな。空気も水も、当たり前にあるんじゃない。生きられるだけで奇跡なんだ」

詰め寄り見下ろす壮年の男。彼は火星からの移住者だとデータにあった。開発初期のテラ・フォーミングでできたドームは、月とは比べ物にならない脆弱さだったと聞く。宇宙テクノロジーは衰退し、今ではアイソトープ農場として管理者以外は無人となった星で育った境遇。それが彼の人格形成に

大きく関わっているのは理解できる。だが。

「僕は星間連絡員です。人間の脆さは身に染みて知っています」

隕石事故でそれだけの宇宙船が虚空に消えていったろう。開拓星の謎の病。ドームの不具合。冷凍睡眠装置のボルトの緩み。スペース・スーツの小さなキズ。地球を離れ帰る場所を失った人類にとって、不測の事態は死を意味する。

「……そうだったな。頼んだぜ」

誰も特別ではない。どこで生まれ、どこで育っても、人間はあつてなく死ぬ。

十月三十一日十九時四十五分。

心象と裏腹に電子音が軽やかに鳴る。インターホンを押して待ったが反応はない。伊奈帆はドアノブを回した。開く。

「スレイン？」

照明が落ちた室内。誰もいない。気配がない。伊奈帆は扉を開いたまま、室内に足を踏み入れる。

「これ……」

蒼白い燐光に眼を見開く。暗闇に不規則な動きを描くそれは蝶。

「……あれは、やっぱり君だったのか」

主を失った部屋の中をうつろに舞い飛ぶ蝶の先。机の上の  
バラの花弁が、握りつぶされたように散っていた。

## Lost Boys

私の知るかぎり、ピーターが怯えたのは、一生でこの時だけです。「明るくしないで」とピーターは叫びました。

——ジェームズ・M・バリー

「ピーター・パンとウエンディ」

十月三十一日二十時十五分。

「いらっしやいませ」

カフェのカウンターに大股で歩み寄り伊奈帆は聞いた。

「スレインはいますか？」

「え」

若い店員は目をぱちくりとさせ、やがて怪訝な顔で問う。

「もしかして、あんた……カイツカイナホ……さん？」

「はい」

ほんとに來た、と背後に彼は言い、奥からもう一人店員が現れた。見覚えがある。時々、スレインと一緒に深夜のシフトにいた青年だ。

「あ、いつも來てる……。カイツカって、やっぱりあんただったんすか」

「スレインはいないんですか」

「辞めたんだ、今日。來たの、つい一時間くらい前だよ」

彼はエプロンのポケットから折りたたんだ小さなメモを取り出した。

「あんたが來たら、これを渡してくれって」

伊奈帆は受け取りそれを開く。

——10/31 21:35 ルナゲートA-cape31連結通路に——

「スレイン、何か言っていました？」

店員二人は顔を見合わせる。伊奈帆と顔見知りの方の店員が口を開いた。

「俺らには、お世話になりました、って。新しい仕事が見つかったって言ってたよ」

「わかりました」

ちよ、待つて、という慌てた声に振り向く。

「あの、あんた、おまわりさんだろ？ あの子なんかしたの？」

伊奈帆は二秒ほど逡巡し、ぺこりと会釈をして答える。

「非番なんで。デートの迎えに來ただけです」

「で、でーと？ あ……なんだ」

付き合ってたんだ、やっぱり、という声を尻目に。ガラン、

と律義に電子音が退店を知らせた。

十月三十一日二十一時十五分。

数時間前に死体があった場所。そこに今、青年が一人。外壁沿いの高架通路の欄干に肘をつき、古くなった剥き出しの配線に光るグリーンランプの点滅を眺めている。ジーンズにシャツ一枚の薄着で、持ち物は何もない軽装。彼は伊奈帆が近づくと髪を耳に掻き上げた。影の濃い指の形を無意識に見つめる。この手は。

この手は、人を殺した手なのだろうか。

「来てくれたんですね」

古い金属とオイルの匂い、耳障りなノイズの中のその声は、うっとりするほど柔らかい。怖いくらいに。

二人の間は約二メートル。これ以上近づくことは躊躇われた。ピリピリと肌に感じる、張り詰めた危うさ。衝動的に飛び下りたら、という懸念が拭えない。

伊奈帆はポケットに右手の親指を引っ掛けた。

「デートに誘ったのは僕だよ。すっぱかすわけない」

「ふふっ」

スレインは伊奈帆を見た。困ったような微笑みは、これま

で何度も見たことがある。だけど。

「……ムービーは中止ですね」

「うん」

どうしてだろう。初めて見るように思うのは。

「ピーター・パンのストーリーを知っていますか？伊奈帆？」

「実は知らない。予習しようとは思ったけど」

スレインが、それどころじゃなかったですからね、と微笑む。

「悲しい恋のお話なんですよ」

スレインはくるりと体の前後を入れ替え、欄干を後ろ手で握った。腰掛けるような姿勢で彼は上を見る。

「ウェンディという女の子が、大人にならないピーター・パンという男の子と不思議な島で冒険するお話です。いるのは子どもばかり。お母さん代わりに、ウェンディは子どもたちの世話をします。ウェンディはピーターが好き。けれど、ピーター・パンは永遠の少年。ウェンディは大人になって、やがて彼女の子どもがピーターに……」

伊奈帆は彼の視線の先を追う。ドームの緑の天井は、様々な機械類が赤と緑と白色にずれたパターンで点滅していた。

「伊奈帆。フック船長って、知っていますか？」

「フック？」

「ジェームズ・フック船長。ピーター・パンの宿敵です。ワニに食べられた片手が、義手ではなく、フックになっています。海賊らしい海賊、船乗りらしい船乗りほど、どこかが欠損しています。手や、足。そして目」

スレインは上を見たまま微笑む。

「僕は、本物の海賊に会ったことがあります。詳しい事情は知りませんが、海賊の罰を受け、無人島で野垂れ死ぬ寸前でした」

彼には天井の明滅が、星の光に見えているのかもしれない。

「彼もまた、身体の一部が不具だった」

配電盤の光を受ける横顔は悲愴で美しい。

「貴方と同じ、左の目」

スレインは伊奈帆を見た。彼の瞳は淡い碧の色をしている。彗星の尾のようでもあり、暗闇に光る鉱石のようでもあり、凍てつく星の氷の断面のようにも見えるその色。

「初めて貴方を見た時。僕、びっくりして。だって、顔も声もそっくりなんです」

その眼が激情に揺れていた。氷のようにも、炎のようにも、そのどちらにも見える。目まぐるしい感情の揺らめきと輝き。目を逸らすことなどできない。伊奈帆は渴いた喉をこじ開ける。

「……僕は、その人の代わり？」

スレインはふるふると首を振った。

「伊奈帆は伊奈帆です。似てるところもあるけれど、全然違います。それに僕、その人の名前も知らないんですから」

彼は胸の上で手を握りしめる。

「伊奈帆。僕、君が好きですよ」

スレインが一步、また一步と足を進める。伊奈帆は後退りしそうになるのを堪え、ぎり、と奥歯を噛み締める。

「……スレイン。……僕は」

一步。

「僕を捕まえに来たんでしょう？」

また一步。

「わかりますよ。そのくらい。伊達に長生きしていません」

もう、手が届く。唇を湿らせ、彼は微笑み次の言葉を口にした。

「月面都市ムーンバレー第6区連続殺人事件。事件コード..ヴァンパイア。八人の男の頸脈から血を抜き取った。その犯人は僕です」

伊奈帆はポケットに手を入れる。証拠品である花卉を取り

出した。スレインは無感情にその様子を見つめている。

「この花弁は『ブルームーン』だね」

ビニール袋に入ったそれを見て、スレインは頷く。

「そうです」

「どうして証拠を残したの？」

そこで彼は小さく笑った。首を傾げる仕草は軽やかだ。

「伊奈帆以外には、証拠だってわかりません」

伊奈帆は、袋から花弁を一枚取り出した。握られ褪せたバラの色。欄干を越えはらりと舞い落ちる。これは証拠隠滅にあたるのだろうか、と考える。

「僕の仕事を知っていた？」

「ええ」

「どこまで？」

「連絡員でしょう？」

スレインはさりとて言った。ほら、アパートで鉢合わせた時、と彼は手を翻す。

「月で暮らして長いのか？　なんて。普通聞きませんよ。迂闊でしたね」

まだ名前も知らない頃。アパートの部屋の前での会話を思い出す。確かに迂闊だ。通常なら考えられないあの行動。そうか、と気づく。あの時。僕はもう、君のことが好きだった。

た。

伊奈帆は花卉の最後の一枚を袋から出し指から離した。換気口の風でそれは下層へ運ばれていく。

「スレイン。人を殺したの？」

「はい」

「血液は？」

「……ここに」

彼はみぞおちの辺りをさする。腰周りの布が、空気を含んではためいた。

「偽証は罪になるって知ってるよね」

スレインは腹に上で両手の指を重ね微笑む。

「本当です。僕は、人間の生き血を飲むんです」

スレインでさえなければ、話も聞かず連行しただろう。僕は。

「ほら。ドラキュラ伯爵ですよ。伊奈帆は詳しいでしょう？」  
いつか読んだ本の話だ。そうとは知らず僕はあの時、残酷なことをしていたのかもしれない。

「御伽話としてはね」

「御伽話で済むなら、良かったんですが」

スレインは人差し指を唇に引っ掛けた。横向きに引く。犬歯が覗いた。通常よりも大きく鋭い。狼のような尖った歯。

「ある時、僕の身体は作り変わり。それからずっと、長い時を生きています」

「作り変わったって、どういうこと？」

「歳を取らず、死なない。ピーター・パンと同じです」

昔は飛べたと言っていた。あの話は本当だったのかもしれない。

「殺しの理由が、聞きたいんだけど」

ドーム内の殺人は、どの惑星でも最も重い罪になる。それを立て続けに八人も。どんな事情があるにせよ、二十六世紀の人類としては禁忌に等しい。決して許されない犯罪だ。

スレインは感情の凧いだ表情で言う。

「楽しんで殺しているわけではないので。……僕にとって、殺しは食事ですから」

いつかのレイプ現場が脳裏に浮かぶ。結果的に助かったのは、暴行していた男たちの方だったのだ。

「ラボから逃げて第6区へ？」

スレインが双眸を見開く。ラボのことを知っていたのか、という表情だった。

「背中への傷は、その時のもの？」

死に値するひどい傷痕。彼の犯罪が残酷な実験の結果なら。それなら、仕方がないという気持ちに伊奈帆はなっていた。

「違います。もっとずっと前ですよ」

しかし、スレインは呆気なくそれを否定した。

「あのラボにいたのは、七〇年くらいかな。ほとんど眠っていました」

「眠っていた？」

「コールドスリープの開発実験に使われていたんです」

伊奈帆の肌は無意識に冷たくなった。凍眠の前後のまどろみと乖離の感覚を体が覚えていたからだ。コールドスリープの技術が確立されたのは二四五五年。それから四十九年。話の先を待つ。

「完成してから眠りは覚めなくて、僕としては、その方がきつと良かったのですが」

スレインは首を振る。

「ポッドを開けた人がいて、眠っている間に連れ出されました。三ヶ月くらい前のことです。それは科学者でも何でもありません、スポンサーの一人だった。施設見学中に興味を持ったように、要するに僕は盗まれたんです」

呆れたような表情だ。彼を翻弄する運命に憎しみを表さないのが不思議だった。

「面白いベットの手に入れた、そういう感じでしたね」

「その人は？」

「死にました。僕に血を奪われて。第4区の出来事だから、君たちは知らないでしょう？」

その通り。もみ消されたに違いない。

「その後、君は6区に？」

「いえ。昔の住まいが4区にあつて。しばらくそこに住んでいたけど、引っ越ししました」

「引越しは必要だったの？」

「すごく古い建物で、床が抜けちゃったんです。それに、追跡の気配があつた。そこからは区を転々と」

話が繋がった。繋がってしまつた、と言うべきか。

「君が来たから。バレているんだなあと思つてました。何も言わないのが不思議でしたが、貴方、知らされていなかったのですか？」

「調査」

「ふふ、何世紀前のシチュエーションでしょうね」

可笑し気に笑うスレインを見つめ、伊奈帆は疑問を必死に探す。こんなの全部作り話で、僕をからかっているだけって言つて欲しい。

「昼間出歩かないのはなぜ？」

スレインは複雑そうな表情で、眩しそうに両目を細めた。月面を歩いていたのが彼ならば、宇宙線をまともに浴びて生

きている。人工太陽が駄目なわけではないのだろう。それとも、概念が身を焼くのか。

「そういう暮らしが、もうずっと長かつたから。……それに、人に会わなくて済む。家族連れや子どもにね。第6区でもいるんです。家族がいて、まともに暮らしている人たちが」

見た事のない暗い瞳。表情を失つた顔で彼は呟く。

「理性を失い僕が襲い掛かる相手は、救いのない男がいい」

氷のような声。第2区で、モルモットとして生かされていた以外にも、様々なことがあつたのだろう。非人道的で悪趣味な想像がいくつか浮かび、伊奈帆は思考を切り替える。

スレインは歌うように次の言葉を口にした。

「“空は非常に暗かつた。一方、地球は青かつた”——知っていますか？ 初めて地球を見た人間が残した言葉」

ブルー・プラネット。その眼差しに、失われたブルーが焼き付いているようだった。今やプラトニウム灰が大気を覆う死の惑星。彼はそうなる前の、たくさんの水と空気で満たされていた青い地球を知っているのだ。

「地球からの開拓移民？」

「その時は流刑者として。つまり奴隷です」

断片的に聞いただけでも、あまりに過酷すぎる生。彼の真実を聞きたいような、これ以上聞きたくないような心地にな

る。

「だから、この身体にチップはありませんよ」

「そんなので、どうやって生活してたの？」

いや。聞かなければならない。

「初代開拓移民は、チップを埋め込む代わりに、申請すれば市民登録がなされ身分証を発行してもらえたんです。チップの手術は当時コスト高でしたから」

スレインは左側の髪を搔き上げ、顔を横に向けた。耳の後ろにコードが彫り込まれている。

次々に引っ掛かりが溶けていく。それは同時に、彼がこの事件の犯人であることを真実に変えていく。

「有効期限も更新ありません。場当たりの処置ですが、この世代はドーム建設で肉体を酷使し、宇宙線を浴びて早死でしたからね。まさか、数百年も長生きする市民がいるとは考えていなかったのでしょうか」

確かに、そんなのは想定の外だ。どんなに優れたコンピューターも。作ったのは人間のだから。

「住まいや職の手続きは、カグヤでオートですから。僕の登録年月日や年齢が人目に触れることはありません。機械は不便ですね？」

スレインは穏やかな表情で伊奈帆を見つめた。どうしてだ

ろう。嘘のような話を信じたくない僕がいる。眼差しに込められた年月で、それがまごうことなき真実だと分かったから。『……懐かしいな。初め月面を歩いた時のこと。空が無いのに驚きました。クレーターに覆われた色の無い大地。どこまでも続く漆黒の宇宙と夥しい数の星々。その中に、奇跡のような青。地球がぽっかり浮かんでいた。もう四〇〇年くらい前になります』

「四〇〇年？」

「僕が生まれたのは、西暦一七六三年。人類が月に到達するずっと前のことです」

もう何一つ、聞くべきことは無くなった。伊奈帆は腿の横に下げた両手の拳を握る。

「僕は、君を捕まえに来たんだ」

「知っていますよ」

スレインはくしゃりと笑って、ダストゲートの先に視線を向けた。

「でも、せっかくだから。少し歩きませんか？」

一步、二歩と彼の背中が遠ざかる。彼の周囲に、いつの間にか青い蝶が舞っていた。一羽、二羽、三羽……。どんどん増えて、守るように彼の周囲を戯れ飛ぶ。それは彼が特異な存在であり、荒唐無稽な彼の話が現実だったと示していた。

伊奈帆は咄嗟にその後を追って駆け出した。スレインが肩越しに振り向く。

「ブルームーン」の花弁の理由。僕の秘密を見せてあげます」

時刻は0時をちょうど回った。

「空気、空気……空気はいらんかね……水のような空気に氷のような空気……いっぺん買ったら、つぎも買うよ……こちらは四月の空気……こちらは秋のそよ風……こちらはアンティル諸島のパイヤの風……」

——レイ・ブラッドベリ「夢見るための緑のお酒」

真空中に剥き出しの地表を伊奈帆は歩く。クレーターの丘を越え、岩石を迂遠し、時折、降るような星を目に映し。

1/6の重力でも、宇宙服での移動は不自由な上、体力を大きく削られる。サージカル・ヘルメットを取り去れば、呼吸ができず死に至るだろう。たとえ呼吸ができたとしても、宇宙線に体細胞を破壊される。それは、人間も、昆虫も、植物だって同じはず。なのに。

ポリカーポネイトの向こうに見えるのは白いシャツ。歩行に従い微妙に揺れる裾も髪も、月の重力のせいで浮力があるかのように見える。丘陵を登る彼の周りを、青い蝶が燐光を散らし舞い従う。

生身の身体で月を歩く。やはり彼はあの日見た、月の白い

影なのだ。

「伊奈帆。海の終わりです」

スレインはふわりと頂を蹴った。緑の海の最果て。伊奈帆も最後の一线を越える。そして見えた光景に、伊奈帆は思わず声を上げた。

「すごい……」

緑の海を越えた場所。“月の裏側”の領域。太陽の光の届かない残骸の散る荒れ果てた大地であり、月面都市の繁栄という光の、影の部分を担う場所。だと、認識していた。

「どうして、こんな……」

火星のプラントでも見られない。もはや映像や無機物で見えることのない、いや、それでも再現できないだろうと思われる、薄紫の美しい花園が広がっていた。夢か、幻か。信じられない情景。数え切れない花々が、見渡す限りの地表を覆い尽くしているのだった。咲き乱れるのはブルームーン。その茨が覆う地表近くで、モルフオ蝶が白色矮星のような光を放ち羽ばたいている。

「生きた人間が、ここに来たのは初めてです」

スレインの声がスペース・スーツのスピーカー越しに聞こえた。彼は、宇宙服も酸素ボンベもなく、シャツとジーンズの軽装で花の中に立っている。彼の周囲に、螺旋を描いて蝶

が飛ぶ。

この草花や蝶と彼は同じだ。真空の宇宙に生身を晒しているというのに、絶命しない不思議な命。

伊奈帆はすう、と深く息を吸った。ボンベの無機質なおいが脳と視界をクリアにする。

「ここで、僕を殺す？」

スレインはぼかんとした顔で数秒押し黙った後、声を上げて笑った。

「あははっ。やけに無口だと思ったら。そんなことを考えていたんですか」

スレインは笑いすぎて臍に浮かんだ涙を拭った。今まで見た彼の表情のどれよりも、人間らしく思われた。真空の月面において、涙は玉となって宙へと浮かび、すぐに白い灰となる。

「僕は、貴方を殺したりしません」

涙だった白い灰が、花々の上に消えていく。

「どうして、月に花が咲くの？」

スレインは肩を竦める。

「全部、僕の血を吸った花です」

枯れることはありません。この場所で、新たに蕾をつくることも。

スレインが人差し指を肩の辺りで軽く曲げる。一羽の蝶がそこに留まった。

「この蝶も、君の？」

「ええ。消えたり、現れたり。不思議な蝶。もう随分長いこと、僕に纏わりついている。……元々は死体に群がる蝶です。僕は死臭がするのでしょうか。だからせめて、家には花を飾ったのです」

彼がコーヒーションップに勤めていたのは強い香りのせいかもしれない、と伊奈帆は思った。

蝶が彼の肩に留まる。

「この庭で……。眠りたかった」

スレインは俯き首を振る。

「空腹が過ぎると理性は消え去り、僕は夢遊病者のように彷徨い……」

どこか虚ろな瞳が伊奈帆を映す。

「気がつくとき、喉笛に噛みついてるんです」

そんなことの繰り返し、と彼は茫然と呟く。伊奈帆は、シャトルから見た彼の姿を思い出していた。あの時。スレインは意識を失った状態で、生き血を求め、街を目指して歩いていたのだ。彼はただの人ではない。場所や時代によつては、迫害の対象となる異質な存在に違いない。けれど、人と同じ温

度の肌、流す涙と、脈打つ心臓がある。生きているのだ。人と違うメカニズムで。

「ここで死ねれば。でも、空気もなく、宇宙線を浴びて、それでも生きている僕が、どうやって死ぬことができるんでしょう？」

スレインは背中側の服の中に手を入れて、何かを握って取り出した。それは宇宙光を冴え冴えと照り返し白銀に輝く。

「伊奈帆」

金具の錆びついた拳銃は、本物の木と鉄を手仕事で組み立てたフロントロック銃。化石めいたその武器は、彼の目が悲壮でさえなければ、レプリカか何かと思う程の代物だ。伸ばした腕の先。銃身は握られ、グリップは伊奈帆を向いていた。

「僕を、ここで撃ってください。……銀の弾丸ではないけれど」

運が良ければ死ねるかも、と全く期待していない顔で彼は言った。

「どうして、僕が？」

伊奈帆の問いにスレインは笑った。眩しそうに目を細め、くしゃりと左頬に笑窪ができて、口の端に牙が覗く。

「僕は、この時のために生きていた。そんな気がするんです。

……伊奈帆。ここで君に撃たれるために」

## Grave

「きみがかわいそうな気がする。固い岩ばつかりの地球で、とても弱く見える。いつか、自分の星への思いがあらまり募ったら、きみを助けてあげられる。きみを……」

——サンテグジュペリ「星の王子さま」

「この銃は？」

受け取らず、伊奈帆は両腕を下げたまま静かに聞く。スレインはゆつくりと瞬きをした。

「七百年ほど前。君と同じ顔で、同じ声の、孤独な海賊が残っていたものです」

掟を犯した海賊は、一つの銃弾が込められた銃のみを与えられ無人島に取り残される。そのほとんどは飢え死ぬより先に喉の渇きで自ら引き金を引くのだ。

「その人は、どうして使わなかったの？」

「弾がもったいない、って言って」

スレインはくすりと笑った。

「死蝶が、彼の目と胸に群がっていた。命の終わりが近いことを、僕は悟りました」

無人島に、死にかけの海賊と不死のヴァンパイアが二人きり。

「その後、どうしたと思います？」

スレインは宇宙を仰ぐ。虚空を見つめる遠い目は、月の裏側から見える筈のない地球を映しているように思えた。もしもそこに地球があったなら、鈍い濁った灰色の星が、青さを取り戻したかのような錯覚に陥る横顔だった。

「二人で並んで、話をしながら月を見たんです。可笑しいですよね」

その泣き笑いの顔を見ていられずに、伊奈帆は視線をそつとずらした。しかしまた、すぐに彼の顔に視線が吸い寄せられてしまう。

「彼と浜辺で見た月は、記憶の中のどれより綺麗です」

スレインは拳銃の鍔を愛おしそうに撫でる。銃弾の場所がその少年の心臓の位置であるような眼差しで。

「海賊の少年は、死なない僕を……。生きていない僕を、生きていく気持ちにさせてくれた」

自分は死んでしまうのに、と彼は小さく呟く。

「……彼の問いが、……もうずっとこの耳に残ってる」

——月の裏側には、一体何があるのだろう。

「その問いかけが、いつしか僕の理由になった」

「理由？」

「生きる理由」

スレインは瞼を閉じた。睫毛が頬に落とす影が震えている。

「僕は初めてその言葉を聞いた時、何もないんじゃないかと思った。どこまでも、死の世界が広がっているだけだと。月は何も隠していないと」

現れた双眸は純粹な光を灯し、澄み切っていた。

「そのうち、何かあればいいと願うようになった。樂園でも。地獄でも。ありふれた日常でも、戦火の荒廃でもいい。何かがあれば、と」

「……この庭は、その願いの果て？」

最初は何も無かった、とスレインは周囲をゆっくり見回した。

「だから僕は、花を植えました」

彼は自身の手を見る。その手の周囲を二羽の蝶が戯れに舞う。

「僕の血に浸した種を蒔く。ダメだった。次は苗。ダメだ。成長した花なら？ 気が遠くなるような作業を繰り返しました。地表が赤く染まる頃、成長した草花がようやく根付いた。

そのほとんどはすぐに枯れてしまいましたが、血に塗れた月の大地に、ブルームーンだけが適合した」

彼がたった一人で造り上げたのだ。蝶を纏い、その指で花を植えた。何百何千の夜を越えて。

スレインは拳銃を持った手をだらりと下げ、天を仰ぐ。百億千億の星々があり、そのどれもがけたたましく光っている。月の裏側には夢のようなブルームーンの花園があり、寂しい目をしたヴァンパイアが一人そっと花を摘む。その美しい情景は、彼の願いの結晶だ。名前も知らずに死んでいった海賊への弔いなのだ。

伊奈帆は、その海賊が羨ましいと思った。そしてその海賊が、自分のために人生を捧げる存在を、きつと望んでないだろうとも。月の裏側だって、自分で確かめたかっただろう。それが船で暮らすことを選び、故郷を持たない人間の生き方だから。

「……でも、僕は知っている」

スレインは茨を握る。皮膚を突き破り血が流れ出る。流れ落ちた血の雫は真空中で白い灰と化し、茨の棘に吸い込まれるように消えていく。脈動するかのように茨が蠢いた。まるで生き物のように

「この庭は偽物。どの花も、地球のように生きてはいない」

彼の血液がブルームーンを生かすのだ。血を与えるのは花のため？ いや、違う。血を求める衝動に抗えなかった。罪の贖いとして花を生かすようになったのか。どちらにせよ、彼が殺した人間たちは、結果的に花の養分となった。

「僕もそう。死なない。それは、生きていないということと、同じじゃありませんか？ 何百年もこんなことをして、結局元に戻るんです。何度だって思い知る」

人間の僕は死んだ。ここに在るのは、醜悪な命の抜け殻だと語る声が悲しく響く。彼の手には白い灰が握られており、指を開くとそれは真空へさらさらと漂った。

「君は、いつからその身体に？」

スレインは瞼を閉じ、風を受けるように頬を晒した。

「——こんな歌を知っていますか？」

## Al-d-Noah

「バラムとセニョール・パブロが話をして、きみたちは祭りのあと部族を去ることになった」

とマヤクが言った。

「なんの祭？」

「月追いの祭りだよ。十二番目のね」

シエバは問い返すように、マヤクを見つめた。

——ジクリト・ホイク「月の狩人」

アマゾンで見たわたしだけの夢-Mondjager」

白い白い白い月

赤い赤い赤い星

花は月に濡れ

川は赤く光る

月の涙に星の声

白い白い白い涙

赤い赤い赤い声

白い月を追いかけて

赤い星に口づけを

柔らかく低い声で歌われる素朴な旋律。手が届くほど近くにあるのに一度も行ったことのない地球の歌だ。余韻が消え去った無音の中で伊奈帆は聞く。

「その歌は？」

「ノアとアルの歌」

スレインが囁くように答える。知らない歌なのに、たまらなく懐かしい感じがした。

「南半球の熱帯地方。月と火星を信仰する部族です。ノア、アルはそれぞれ神様の名前。僕と父は、その部族と数年間を共にしました。僕の父は研究者で、その部族の文化は興味深い研究対象だったようです」

彼は嘘みtainな真実を語り出す。伊奈帆は、彼の話をずっと聞いていたような、すぐにでも耳を塞ぎたいような、相反する気持ちに襲われた。

「僕が十四歳の時、父が死にました。そしてその夜。火喰い

の祭りが行われた」

「ヒクイの祭り？」

スレインは胸を押さえ、苦しそうに指を握った。

「火とは火星。心臓のことです。死んだ人間の心臓を、食べるんです」

「まさか……」

僕も食べた、と言った声は消え入りそうに掠れていた。スレインは口元をひきしめ、伊奈帆に視線を送った。

「……それから二年後。日照りのひどい月が続いたある夜。月追いの祭りをすることが決まりました」

伊奈帆は眉を寄せる。

「ツキオイ？」

「数年に一度。満月の夜に、月の子を追いかける祭りです」

古代の地球の習俗があまりに想像の外で、とても理解が追いつかない。

「月の子、って？」

口に出すと背中に氷が滑り落ちたような寒気があった。不吉な響きを持った言葉。スレインはそんな伊奈帆を見て、気の毒そうな表情を浮かべる。

「人柱ってわかりますか？ スケープ・ゴート。非論理的な犠牲者です。祭りの夜、逃げる月の子を追ひ、捕まえるんです」

「捕まったら、どうなるの？」

スレインは無言で笑う。眼の丸みも口元のカーブも左右対称の完璧な微笑。瞳だけが暗く光るその表情はあまりに壮絶で、伊奈帆は言葉を使い、許しがたい様々な光景が脳裏を目まぐるしく駆け巡った。

スレインはしゃがんだ。風もなく銀細工のように静止した月の花に、語り掛けるように続ける。

「……族長の娘が、月の子に選ばれました。月の子は人々の苦しみを引き受け、その夜、月に登るのです。……ということかわかりますか？」

「人間の死を、月や星で表現する文化があるのは知っている」

スレインはこくと頷き、瞼を閉じる。睫毛が震え、唇の色は噛み締め白い。

「僕は、その少女のことが好きでした。父を失った僕の、唯一の心の拠り所だった。彼女がいなければ生きられない、と思うくらい」

「スレイン……」

鮮明に覚えている。野生の濃い熱帯の匂い。熱帯植物を揺らす夜の風。傘のような葉の隙間から見える星の瞬き。僕の

名を呼ぶその声と、陽光を束ねたような彼女の長い金の髪。真珠のような涙の粒。梳るように欠けた月の光が青く包む夜のことを。

「やっぱり、私が……」

「もう決まったことです」

「どうして、こんな……」

あの夜。少女の頬を流れる涙を何度拭ったことだろう。

「泣かないでください。……これを」

手渡したのを見て、彼女は大きく目を見開く。こぼれそうな大きな瞳で僕を見つめた。

「でも、これは、亡くなったお父様の形見でしょう」

スレインは彼女の手を包むように握る。父が死に、父の持ち物は奪われてしまった。たった一つ残ったのが、幼い頃から身に着けていたお守り代わりのペンダント。形あるもので残せるものはこれしかないのだ。

「いいんです。父も喜ぶと思います。それに、天国までは持つていけませんから」

「ああ！」

受け止めた体に踵が浮く。彼女は女神でも聖女でもない、生身の身体を持っているのだと知った。胸を打つ彼女の鼓動としゃくり上げる呼吸に、生の匂いが強く香った。

「お願い、逃げて。スレイン」

「いけません」

彼女は激しくかぶりを振る。駄々っ子のように泣きながら、彼女は腕にしがみつく。

「私と一緒に逃げて」

見つめる視線に心が揺らぐ。彼女は爪先で立ち、吐息が唇に当たる。

「……姫様」

「おねがい……。貴方となら、私……」

肩を抱き、そつと体を押しやる。顔が見られなかった。きつと、ひどく傷ついた顔をしているに違いなかったから。

「僕は、ここへ来た道を覚えています。険しい山を幾つも越えます。空気は薄く、水は乏しい。齧る草木もあります。

……僕ら二人の足では、とても逃げきれない。二人とも死んでしまいます。姫様は、生きてください」

立ち尽くす彼女の右手を持ち上げる。

「僕の目を見て？」

「スレイン……」

彼女の冷たい手を包み、濡れそぼった瞳の奥を覗き込む。語る瞳に微笑みかける。

「大丈夫です。ほら、そのペンダントを見て。同じ色をして

いるでしょう。僕は、ずっとお傍におります」

白い手の甲。この汚れない肌に誓おう。もう、僕にはこの命一つしかない。その全部で、今、貴女を守ることを――

臉を開くと、蝶が左へ横切った。その先にいる宇宙服の青年にスレインは笑いかける。ヘルメットの中の表情はいつもと同じように見えた。しかし、彼が自分の話に集中しているのは分かる。スレインは話の続きを語り出す。

「彼女の代わりに、僕が役目を引き受けました。族長の一族のルーツは、亡命の末にそこへ辿りついた北歐人でした。身体の色素が薄いことで、先住民から神秘的な存在として扱われるようになっていた」

遠い昔に失われた王家の末裔だと父は言っていた。どういう理由で彼らは旅をしたのだろう。地球の裏側に近い場所まで、一体何から逃げたのだろうか、とスレインは思う。

「そういう理由で、月の子は、僕でもかまわないということになったんです。余所者に代わりが務まるかという反対もあったのですが、強引に決定された。族長も、大切な娘を失うのが忍びなかったでしょう」

古い疵が、電流が奔ったように疼く。胸。背中。腕と足。

耳。眼球。啞内。直腸や内臓。すっかり治って痕が残っていない箇所までも。羽を失った時よりもずっと深く、その痛みと恐怖は神経に刻まれている。

「惨い祭りでした。僕も数百年の長い時を生きてきて、様々な惨状を経験しましたが……。そんな今でも、あの夜のことには思い出すと寒気がします」

打たれ、切られ、挟まれ。身体中を暴かれて、裂いた腹の腑を直に掴まれる恐怖。意識を手放したいと願っても、煙となつて立ち込める香の作用がそれを許してくれない。永遠のような時間。もはや自分が生きているのか死んでいるのか分からないまま、切り取られた自分の部位の幾つをも、開いたままの目が映した。

「死んだはずでした。僕は」

どこかで意識が途絶え、どこかでまた、意識が再び現れた。真つ暗で、土と、腐った花の臭いがした。本能的に上に向かって腕を動かすと棺があり、こじ開け、そして土を掘った。爪が何度か剥がれ落ち、その度生え変わるのを知った。やがて頬にねっとりとした夜の外気を感じ仰ぎ見たのは夜空。月は爪の形をしていた。

「墓の中で生き返り、……その時にはもう、この身体は変わってしまったっていた」

——蝶が舞う。宇宙線に青く光り。花が咲く。クレーターで血に蠢き。語る声は柔く優しく真空を貫く。

「君は、これを作り話だと思いますか？ 伊奈帆」

月の裏側でスレインは笑う。防護服もマスクもつけず、身の身体をそこに晒して。伊奈帆は考える。彼の話と、彼の現状。彼にとつての真実について。確かなことは、彼の身体は無数の傷痕。身体から離れると灰と化す彼の血と肉。宇宙空間において生命活動を存続できる体が今、そこにあること。困ったように笑う顔の角度も笑窪も、コーヒーシヨップで向かい合った時と変わらない。凄惨な宇宙線のただ中だということ。

人間なら即死。彼は果たして人間か。

伊奈帆はきっぱり首を振る。

「いや。事実だと思う。そして、仮説はある」

そんなの、人間に決まっている。

「仮説？」

思いがけない切り返しだったらしく、スレインは目を見開いた。

「君の身体の変化について。カニバリズムがタブーとされて

いる理由を、君は知っている？」

その言葉に彼は眉を顰め、小さく首を傾げる。

「人道的な理由以外なら、病気になるってことでしょう？」

「うん。代表的なのはプリオン病。僕は、星間連絡員として開拓星をいくつも巡った。それで、わかったことがある」

人間は徐々に、その惑星に適応していく。岩石の惑星。鳥の惑星。風の惑星。夜の惑星。そして、雨の惑星。

「様々な要因で、ヒトの体は変異する」

視力を失い、聴覚が特化するもの。空気抵抗を無くすため皮膚の凹凸が消えたもの。鱗めいた皮膚をもつもの。様々に変異した人間の記録を星々へ届けた。彼らの望郷の思いとともに。

「君の身体も変異したんだ。その二つの祭りで。おそらく、酵素と光線。それに薬物。危機的状況における神経伝達の異常」

スレインはふつと笑った。口の片側を曲げ片方の目を細めた皮肉な笑みだが、瞳はどこまでも澄んでいる。吹くはずのない風が吹いたかのように、金糸の髪が宙に踊った。

「貴方、それを信じてますか？」

「僕は、思いついた理屈を口にしてるだけ」

スレインは目を細め、二人の間に静寂が訪れた。音一つな

い花園で、青い蝶の羽ばたきだけが時を刻む。やがて彼は伊奈帆に問う。

「僕を、どうします？」

「今、考えてるところ」

スレインは、手に持っていた拳銃を大切そうに懷に仕舞った。両手を肩の高さに上げる。

「いいですよ。捕まえるのなら抵抗しません。研究施設に行して、人体実験でもなんでも。2区のサイバネティクス研究所に僕のカルテがありますよ」

伊奈帆は顔を曇める。

「そういうのは、好きじゃない」

スレインは呆れたようにふふつと笑う。

「好きとか嫌いとか……。ほんのさっき、理屈を言っているだけ、と言った人物の発言とは思えませんね」

そして、彼は首を振る。前髪で顔が見えなくなる。

「どうして、僕にこだわるんです？」

伊奈帆はスレインの髪に隠れた額を眺め、彼が服に仕舞った海賊の形見を思い、そして彼がかつて見たであろう地球から見た月の形と、月から見た地球の色を闇空に懸命に思い描いた。

好きとか、綺麗とか、また会いたいとか。寂しいとか。怒

りとか。そういう感情を知っていた。つもりだった。でも。

宇宙服の内側に鼓動がエコーする。あんなに重かった身体が軽い。言葉ではない意思が神経を巡る。色んな回路が繋がって、心の中で何かが噛み合った音がした。

「スレイン。……僕はね」

今までのどんな気持ちより透明で、どんな気持ちより純度が高い。こんなのは初めてだ。

「君が好きなんだ」

こんなに、何かに、誰かに、執着したことはない。見ていたいのに見てもらえない。伝えたいのに伝えられない。言葉にしたいのに、思うはしから溶けていく。ずっとこの瞬間が続けばいいと思うと同時に、全く別の瞬間が訪れるのを待ちきれない。思いもよらないことを思ったり、口走ったり。そんな自分が生じたことが、どうしようもなく喜ばしい。

「好きだから、君のことを考える。そういう理屈」

きょとんと目をまんまるくして、その後、スレインは声を上げて笑った。

「僕を好きになる理由なんかありません」

仰け反り、屈んで、気がふれたような、痛々しい笑い声で彼は言い放つ。

「じゃあ聞くけど」

伊奈帆は彼と距離を詰める。スペース・スーツの重さと厚みがかしい。

「君が……、名前を知らない、ほんの数時間会話をして過ごしただけの海賊を今でもそんなに好きな理由は一体なんなの？ 地球を飛び出して、この花畑を、百年単位で作るくらいなの」

「それは……」

口籠る彼の手を握る。感触が薄い。でも、さつきよりずっと近い。

「変えられたからじゃないの？ 自分の世界を」

もっと。もっと近づきたい。

「僕もそう。裸足で月のクレーターを歩くのも、月の地表に蝶が飛ぶのも花が咲くのも。なにもかも衝撃だ。大ショックだよ。明け方のカフェで、デートする？ って、色っぽく言われるのね。いろんな星に立ち寄ったけれど、比較にならない。とびきり特別。スペシャルだ」

同じ虚空中で話したい。

「そのくらい、僕の見える世界は変わった。月が、人工知能に支配された無機質な世界じゃなくなった。この花畑は綺麗だ。それは、文字通り君が血を流して作り上げたからだ。この花

畑も蝶も君も、御伽噺みたいに綺麗で、悲しくて、すごく優しい。僕は君と出会って、苦いコーヒーを飲めるようになったし、都市の模擬自然に懐かしみを覚えるようになった。それは全部君のせい。今の僕が、僕は好きだ。僕は君が好きなんだ」

同じ虚空中で触れ合って。

「だから、ずっと見ていたい。君のこと。見てみたい。たとえば未知の星で、見た事のない色の夕日を浴びる横顔なんかを」

スレインは激しくかぶりを振った。だからと垂れた彼の手の、皮膚の感触は直にこの手に伝わらない。

「冗談はやめてください」

「冗談じゃない。本気」

この手を離せば、いなくなる。影も残さず、彼は消える。そんな予感がした。だからこの手を、絶対離しちゃいけないんだ。

「遠くへ行かない？ 僕と二人で」

どのくらい力を籠めていいのだろうか。痛くはないか。壊れたりしないだろうか。そんな怖さを感じつつ、慎重に指を握り込む。

スレインは戸惑った表情で、問うために口を開く。語尾は

苛立ちを含み上擦って震えた。

「正気ですか？」

そんなこと、僕の方が聞きたいくらいだ、と思い伊奈帆は笑った。

「わかんない。でも、こういう時に正気って必要？」

こんな風に笑うのは生まれて初めてかもしれない、と思うほど自然に、素直に笑える。

「君と、どこかに行ってみたい。楽しそう、ってそれだけの理由」

同じ虚空で夢を見たい。彗星の住処を潜り、オールトの雲を越え。どこまでも行こう。そういう願いが、今生まれた。

「どう？ 乗る？」

しばらく経って、スレインは迷った末、という感じにか細い声で答えた。

「条件があります」

「何？」

このときの彼の顔を、どう言えばいいのだろう。レースのように青く透ける額の静脈。眉間に寄る皺。笑みの形で震える唇。ぎこちない頬と、怒ったような碧の双眸。悔しそうで、怒っているようで、でも、嬉しそう。いや、幸せな瞬間を生まれて初めて感じ、その大きさに怯えているような、そんな

泣き笑いだった。

なんて綺麗なんだろう。この人の心は。

「伊奈帆が、僕の血を飲んでくれたら」

スレインは自身の首筋に揃えた二指をそっと当てた。爪が皮膚に当たった場所の影が細かく揺れている。伊奈帆の口角が夏の少年のように持ち上がる。

「乗った」

生身の額とヘルメットのアクリルがこつんと重なる。真珠のような涙が宙に浮かび、白い粒子に変化する。まるで雪の結晶だ。花々の幾つかは雪のような白い欠片を浴び、風を受けるように揺れた。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ。どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか 百べん灼いてもかまわない」

「うん。僕だってそうだ」カムパネルラの眼にはきれいな涙が うかんでいました。

——宮沢賢治「銀河鉄道の夜」

## 引用・参考文献

- 林完次「月の本 perfect guide to the MOON-」角川書店2000  
 オスカー・ワイルド著／福田恆存訳「サロメ」岩波書店2000  
 梶井基次郎「檸檬」KADOKAWA1951  
 エドガー・アラン・ポー著／河合祥一郎訳「ポー傑作選Ⅰゴシックホラー編 黒猫より『モレラ』」KADOKAWA2022  
 ブラム・ストーカー著／唐戸信嘉訳「ドラキュラ」光文社2023  
 中島敦「李陵・山月記」新潮社1969  
 ジェームズ・M・バリー著／大久保寛訳「ピーターパンとウェンディ」新潮社2015  
 レイ・ブラッドベリ著／中村融訳「ブラッドベリ自選傑作集 万華鏡より『夢見るための緑のお酒』」東京創元社2016  
 サンテグジュペリ著／池澤夏樹訳「星の王子様」集英社2005  
 宮沢賢治「新編 銀河鉄道の夜」新潮社1989



## Epilogue

——西暦三四〇四年。

個室。食堂。パントリー。トレーニングルームに娯楽室。デッキ。伊奈帆は船内案内の添乗員のように宇宙船の中を歩き回っていた。こういうのを、虱潰しというのだろうか。虱ってなんだろう、と重要度の限りなく低い疑問が意識の表層部分に浮かぶ。低重力の外周通路を、両手を気にしながら歩く。カップに蓋がついていて良かった。

居住モジュール内に不在。だとすれば、おそらく機器推進モジュール。最初からそこに行けばよかったな、と思いながら伊奈帆はブリッジの扉をオープンにする。

「スレイン、ここにいたの」

三つ並んだ操舵席の真ん中。ビューポートを向いていた顔がこちらを向いた。につこり笑って彼は小さく会釈する。

「伊奈帆。おはようございます」

「おはよ」

傍に立ち、少し屈むと臉を閉じた顔が上を向いた。触れるだけのキスをして、右手のカップを差し出す。スレインはそ

れを嬉しそうに受け取った。

「コーヒー、欲しかったんです」

おそらくここで、航路の先を眺めているとわかっていたが、先送りにしたのは、どのように接するか考える時間が欲しかったから。どんな様子か心配だったが、いつもの笑顔で安心した。

太陽系時刻の設定による多少の気温や照光操作はあるものの、時刻の定められた業務が皆無の気儘な宇宙船暮らし。朝や昼、夜は気分の問題だ。寝る前にはおやすみ、起きたらおはよう。その程度。一人では意識に上らない些末事。でも、今は一人じゃない。すなわち重要事項だ。起き抜けのキスとコーヒーは。

伊奈帆は左隣の座席に腰を下ろし、自分の分をずず、と啜り顔を顰める。

「君ほど美味しくてできないな」

食堂のコーヒーメーカーから出てきた合成化合物は匂いだけは取り繕っているものの、苦いだけで正直あまり美味しくない。

「何言ってるんです。ボタンを押すだけですよ」

「なんか、違うんだよね」

計器類が静かなブルーグリーンに発光し、断続的なイエ

ローの点灯がある。無機質な淡い光を照り返す横顔が、時折カップを口に運びふう、と小さく息を吐く。オレンジの点滅。首元で反射が連なった。銀のチェーン。スレインは鎖の先の丸い飾りを手のひらに乗せ、じつと視線を落としている。瞬きがどこか緩慢なのは、瞼の裏に遠い景色を映しているからかもしれない。なんとなく、おいてけぼりにされたような気分になる。

航海は順調だ。時折、プラズマがうねるように時空を奔り、別銀河から来た彗星が長い尾を引き通り過ぎる。

眼前を通り過ぎるコメント。スレインの手のひらの中、飾り石が氷のテイルを照り返した。

「その石の色、君の瞳と同じだね」

スレインがはっとした様子で勢いよく顔を上げた。びっくりした顔で伊奈帆をまじまじ見つめている。何か、変なことを言っただろうか。やがて彼はふっと小さく息を吐き、ガラスの向こうに視線を送る。

「なんだか、夢を見ているようです」

そこに見える太陽系の星の並びを伊奈帆は懐かしく感じた。木星を抜けてから、ワープ数をダウンした巡行モードに切り替えてある。一週間前に火星を抜けた。あと数時間で月と地球が見える計算だ。

「……このペンダントが、僕のところに戻ってくるとは思いませんでした」

とても古い首飾り。その意匠を、彼はそつと指でなぞる。

伊奈帆は、彼にそれを渡した小さな手を思い出す。一五〇年ほど前に訪れた、とても遠い惑星のこと。美しいエメラルドグリーンに輝く森の惑星。このペンダントの持ち主の董色の瞳の少女を。あどけない声が歌う詩を。紡がれた物語のことを。

——白い月を追いかけて

——赤い星に口づけを

同じ歌。スレインが月の裏側で歌ったあの、遠い地球の部族の歌。

「月と火星を目指したんだね。歌の通りに」

緑に覆われた豊かな大地は清浄な空気が満ち、川が流れ、湖があった。霧深く広い森があり、その奥まった場所に石造りの神殿。子どもばかりが何十人か暮らしていた。その中で一番年上らしい少女の一人が、スレインへとペンダントを受け渡した。

「そして、……そこで滅びを迎えた」

十二才と少女は言った。もう間もなく、彼女は大人になるのだとも。

「そうかもしれない。でも、ある意味では、彼らは永遠の命を得たとも言える」

——月追いの夜を、覚えていますか。貴方の心を、ずっとお預かりしていました。

受け継がれるのは鮮明だが一瞬の映像記憶。ジグソーパズルのピースのような断片。遺伝子に刻み込まれたそれは継承を繰り返し、物語は紡がれた。一族が死に絶え、目指すところを追われて行き着いた最果ての惑星。森を作るのは人の名残を残す木々。大地と融合することを選んだ人類が息づいていた。彼らの祖先が地球の緑豊かな森の民であったと知っているのは、このペンダントとスレインだけ。

——地球へ立ち寄ることがあれば、姫さまにお伝えください。確かにお返しいたしましたと。

首飾りの飾り石に、根付く前の少女が託した幾千幾万の夜が彗星のように輝いた。古びた石には傷があり、鎖のいくつ

かは継いだ後が残っていた。最初の少女の忘れたい思い出が文字通り心によって受け継がれ、語り継がれ、悲しい御伽話あるいは創世の物語として時を越えて生きていたのだ。部族の血脈は失われたが、想いだけが憶光年先の銀河の果てまで届いていた。深い森の中のどれかは、スレインが愛した少女の末裔なのだろう。

霧の森と少女の笑顔を右の臉に思い浮かべ、伊奈帆はシートに深く背を預ける。こういう仕草は久しぶりだ。

「こういうことがたまにあるから、連絡員って好きなんだ」  
願いや思いは命を越えて届くのだ。どんなに時が流れても、どんなに遠く離れても。

スレインはくすりと笑い、ペンダントを大切そうに服の内側に仕舞った。小さく首を傾ける。

「もう、何年になりますっけ？」

「何が？」

「ほら、二人で月を飛び出して」

「ああ。駆け落ちしてからね」

「駆け落ち……。どちらかといえは夜逃げじゃあ……」

その時の脱出劇を思い出し、スレインは何ともいえない顔をした。連絡員は様々な状況下において臨機応変さを求められるのは知っていたが、まさかあそこまで力技のぎり押しだ

とは思わなかった、と彼は言う。

「駆け落ちの方がロマンチックでいいじゃない。あれから、ざっと九百年」

「へえ、そんなになりますか」

伊奈帆はふ、と笑みを漏らす。

「これで僕と過ごした時間が、君の人生の半分以上を占めるわけだ」

「嬉しそうな、なんかちょっと腹立ちます」

永久指名手配をされてしまつて以来、モグリ自称連絡員として、星々を巡る日々だ。そこに住む人々の記録と記憶を別の星へと届けるために。その中には、希少な生物や鉱石、文化、テクノロジなど数多ある。宇宙海賊に狙われれば実力行使。トラブルを解決できるだけ、前より気楽で自由な身の上。それは永遠の命を約束されているからだ。

「お姉さん、元氣そうでしたね」

「うん。小さいときに別れたきりだったけど、すぐに分かった」

「家族って、そういうものなんでしょうね」

もう三百年も前のことだが、ケプラー1469cに立ち寄った。驚くべきことに姉は生存しており、邂逅が叶ったのだ。同じ開拓移民と家族となり、山岳地方で暮らしていた。

『ユキ姉、しばらく』

『なおくん!?』

伊奈帆の事情を話すと姉は驚き、質問攻めにして、最後はケラケラ笑った。その笑顔は数百年前見た時のままで、頭を撫でられ伊奈帆は小さな子どもに戻ったような気がした。

『スレインくん、弟をよろしくね』

出立の時、家族で見送りに来てくれた。一番小さな五歳の子どもは伊奈帆のやしやごだ。きつともう、二度と会うことはないだろう。それがわかっていても笑顔で別れることができたのは、スレインが隣にいてくれたからだと思う。

「生きて会えるとは思ってなかったな。君のおかげだ。ありがとう」

「何言ってるんです」

スレインははにかんだ表情で笑い、そしてあつと声を上げた。

「見て、スレイン」

伊奈帆は立ち上がり前方を指差す。スレインが息を飲む。

薄紫に輝くのは小さな衛星。あれは……。

「ブルームーンだ」

伊奈帆の言葉にスレインも身を乗り出した。見えているのは月の裏側。太陽の光を照り返しているわけではない。光つ

ているのは枯れない薔薇だ。月の裏側には、蝶舞う薔薇の園がある。それを、僕は知っている。

「夢みたい……。いや、こんな夢って見たことないや。そのくらい綺麗だよ」

「へえ。情緒のあること言えるんですね」

「なんか、引つかかる言い方だけど」

「めつずらしいなあ、つて。だって、前にムードのある事言ったの、五百年前くらいじゃないですか」

「は？ 嘘でしょ。もうちょっとある。ほら、あれだよ。火星で、鳥を見た日」

「アイソトープの電気鳥？ えつと……、なんでしたっけ。もう一回言ってください」

「もしも……。いや、やめとく」

「ああ、思い出しました。＼もしも君が鳥ならきつと……」

「わ、やめてやめて。やり直す」

「やり直す？」

「えー……つと……」

スレインは何度かコーヒを口に運んだ。

「……………まだです？」

「咄嗟に出ないよ」

「あははっ、似合わないことするから」

今度はスレインが声を上げた。月を左に通り過ぎ、今では遺跡と化した月面都市を視界の端に見送る。

「あ。あれですよ、伊奈帆」

伊奈帆が見たことのない色の地球。いつかの夜を思い出す。

「本当に青いんだ」

——空は非常に暗かった。一方、地球は青かった。知っていますか？ 初めて地球を見た人間が残した言葉——

ああやってスレインが教えてくれたから、僕には今、地球がこんなに綺麗に見える。出会う前の出来事を、わかりあうことも分かち合うこともかなわない。その苦しみと共に生きていくしかない。でも、こうしていつか自分の一部になる。お互いの知らない傷も思い出も。そのための時間は、僕らにはたっぷりある。

「地球だよ、スレイン」

「見ればわかります」

「見ればわかるのがすごいね。僕は青い地球を知らないから」

「そういえばそうですね」

回復した地球。そこには、澄んだ大気と水があり、雲と海と木々に覆われた大地がある。

海を見たことがないわけではない。でも、あのブルーを見ていると、不思議な気持ちに気づくのだ。不安なような。寂

しいような。でも、どこか安心する。そんな気持ち。

「僕は、不思議と懐かしい感じがする」

そう。多分これは懐かしいって感覚だ。あの色を見ていると、と伊奈帆は呟く。

「波の音が聞こえるみたいだ」

「今日の伊奈帆は詩人ですね。どうしたんですか？」

スレインはふふつと笑った。その微笑みで、伊奈帆には浮かぶ言葉があった。

「スレイン」

「なに……あ、さっきのやつですね？」

「うん。そう。ちゃんと聞いてね？」

「はい。伊奈帆、頑張って」

「子ども扱いしてない？ いいけどさ」

伊奈帆はコホンと咳払いをし、身体の向きを変えてスレインを見つめる。

「えっと。その、……地球に着いたら、僕と一緒に月を見ない？」

その時の顔。スレインは見たことがないくらい目を見開き、ぼかんと口を開いた。しばらくの間時間が止まったように静止し。やがて肩が震え出す。俯く彼が泣くかと思いい伊奈帆は慌てた。また、何か変なことを言ってしまったのだろうか。

「え？ ちょ、スレイン？」

「ふっ、……あはははは！」

思いがけない豪快な笑い声。体を震わせ、目尻には涙まで浮かんでいる。

「ちよつと待って。これは笑うところじゃないから」

「あつははははは！ ははっ、はあ、ぶふっ」

「……スレイン」

「ごめん、なさい、ぶふっ、ちょ、ほんとにもう……、ははっ！」

「もう。怒るよ」

「ははっ、はあっ、はあ……。いやあ、びっくりしました。

伊奈帆、すごいですね」

「今、驚くところあった？」

「ぶふっ」

スレインがくすくすと笑う。

「伊奈帆。こっち向いて」

「何？」

頬に伸び、包む両手の指は冷たい。吐息が香り、重なる唇はほろ苦くほんの少し血の味がした。キスの味で脳裏に月での記憶がいくつも過ぎり、出会った時にコーヒーストップで彼が描いたコウモリの絵が思い出された。

「僕ら、海の上を歩けるんですよ」

コウモリの羽はないけれど、どこへでも行ける。そう言つて、スレインはくしゃりと顔を歪ませた。楽しげただけどころか寂しい、不思議な笑顔で彼は言う。

「いいですよ。月を見ましょう。月だけじゃなくて、朝日も、夕日も。海を歩いて、海に映る月の光を渡る。他愛もない話をして。二人で見ましょう。地球の空を」



### 奥付

発行 Scramble/鳴海

発行日 2025.1.13/ZERO の方舟 17

印刷所 (株) しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

PixivID 955950

X @narumiblue

くるっぶ @narumiblue

マシュマロ

<https://marshmallow-qa.com/narumiblue>